

---

# 変節

北角 三宗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変節

### 【Zコード】

Z0073Z

### 【作者名】

北角 三宗

### 【あらすじ】

戦国時代、南奥州塩松。

大内定綱の前半生を描きます。

塩松は強国に囲まれた小国なればこそ、周辺諸氏との外交関係で以つて体制を維持していました。

定綱は主家石橋氏を放伐し、「塩松殿」の名跡を継ぎます。その後も、情勢を読んで他家を翻弄し、勇躍の時を迎えたのですが

……。

弘治の頃（1555～58）。塩松は小浜城。ある昼下がり、大阿弥丸は私室にて、傳人と共に史籍の回読をしていた。

「壬午入吉野宮時左大臣蘇我赤兄臣右大臣中臣金連及大納言蘇我果安臣等送之自菟道返焉或曰虎着翼放之是夕御嶋宮」

『日本書紀』卷第二十八、天武天皇の即位前紀の件である。

大海人皇子は、この大津を出た翌日（天智天皇十年十月廿日）に吉野へ入り、翌年夏までの半年余りを当地にて頓居する。そして、病床にあつた天智天皇が死んだ後、遺児たる大友皇子が自分を弑しようと計画していることを知るや、僅かな兵を率いて打倒に立つ。そして諸勢力を糾合しながら北へ攻め上がり、挙兵からひと月後には大津朝を滅ぼしてしまう。

寡兵にて立ち、大敵に当たつてそれに打ち勝つ。  
英雄譚はいつの世も子供の心を惹き付ける。

大阿弥丸もその例に漏れず、退屈な話の羅列に見える『日本書紀』の中では、ここからが最も好きな箇所に当たる。この分冊ばかりはもう幾度も読んでいるのに、心は逸つた。

そのとき、父の小姓がふすま越しに声を掛けた。  
「お父上様がお呼びです」

大阿弥丸は落ち着いた表情で頷いて見せたが、回読の腰を折られ

たことに不快を得、不意の呼び出しに戸惑い、思い浮かばぬその用件を訝しんだ。そして父の書斎へ歩を進めるに伴い、心が石のようになくなつてゆくを感じていた。

父にしてみれば、いずれ自分の名跡を継がせることになるであろう嫡男のこと。一族の繁栄、そして主家の栄耀の道を託すことになる以上、万事につけ、高みを目指す気持ちを持ち続けるようにと、薰陶してきたつもりだろう。妾腹の子も幾人かいるが、正妻腹で長男となれば、次代の惣領となることはもはや誰の目にも疑いない。

大阿弥丸には、そんな父の評価が狭い了見に捉われているように思われ、殆ど顔を合わせぬ日などないにも関わらず、肉親にも関わらず、馴染むことができないでいる。父の気持ちが解らぬ訳ではない。ただ、惣領としては兎も角も、次代の筆頭家老と言われても、ピンと来なかつた。

主君には男子がない。とすると、いつたい自分は誰に仕える為にこのような教えを受けていのだろう、という疑問がずっとあつたからだ。

ただ、斯様な期待は余計なお世話と感じつつも、書物も弓馬も嫌いな性質ではないことから、常に自ら進んで鍛錬している。そんな前向きな姿勢に対してまでも更なる啓蒙を求めてくるものだから、一層父を避けるようになつっていたのだった。

大阿弥丸は書斎に入つて父に対座すると、暫くの間その凝視に晒された。父は珍しいものでも見るようだ、目を丸くしてジロジロと大阿弥丸の容貌と所作を細見している。

その、いつもは見せぬ父の仕草に、どこか殺氣にも似た鬼気迫るものを感じ取つた大阿弥丸は、頻りに逃げ出したい衝動に駆られたが、正座した膝の上で拳を握り、じつと我慢していた。

父がおもむろに口を開いた。

「其方を、……養子に出すことについなつた」

父の膝下の辺りを見つめていた大阿弥丸は、その言葉に対し反射的に目を上げた。耳を疑つて問い合わせしたが、呑んだ息が継げなかつた。

父の後継者となることを疑わなかつたからこそ、今の自分がある訳で、それを否定されてしまつては、致仕・放逐と一緒に思つた。

父が言葉を継ぐ。

「殿の婿となる」

「……えつ？」

漸く言葉が出た。

主君には、女子も一人いるきりだつた。名を志保といつ。その母は父の妹、つまり大阿弥丸には叔母に当たるので、この女子とはいとこ同士ということになる。

この志保姫は大阿弥丸より少し年上で、主君はこれに婿を取るべく周辺諸氏に様々働き掛けてきたのだが、なかなかまとまらないでいた。

大阿弥丸はずつと、自分はその姫君の婿に入った者の家老になるのだという、漠然とした思いで系図上の彼女の位置付けを意識しており、彼女自身というものに関心を払つたことなどこれまで殆どなかつた。ただ子供心に、まだしつかり見たことのない姫君のことを、その縁遠さから、余程の醜女なのだろうと勝手に思つっていた。その程度の存在である。

自分がその婿に入るとは、ゆくゆくは名代にでもなり、姫との間に生まれる子供に「塩松殿」の名跡を譲る役回りになるということ

である。

大阿弥丸は何とも実感がなく、半ば放心状態の父に倣つて神妙に座つていた。

## 1 (後書き)

初投稿なので、行間の空け方やら1回分の長さや、手探りです。  
ご了承下さい。

塩松は、南奥州安達郡の東半部にある地名であり、地域の総称である。同郡西半部の一本松とは郡の中央を縦断している阿武隈川を境とし、北は伊達郡小手郷、南は田庄村に接する。東の山岳地帯を越えると、相馬領の行方郡や標葉郡に通じる。

地勢は、郡東端にある日山を最高峰として中小の山岳が乱座し、西方の阿武隈川へ近付くに従い平地が広くなる。山岳の谷間を縫うように川が縦横に流れ、それらはいずれも阿武隈川へ注ぐ。小浜川は塩松の中央を南北に縦断、口太川は塩松の東部から南部へ大きく囲繞するように西流する。この両川は小浜北方にて合流、更に阿武隈川へ注いでおり、この二つの川に平行して主要道が走っている。

戦国期、塩松は石橋氏の領分となっていた。石橋氏は足利一門として室町前期に奥州へ下向し、塩松に土着した名族である。

塩松は石橋氏以前から、宇都宮氏や吉良氏といった名門が拝領していた由緒ある土地柄で、石橋氏もまた、一本松の畠山氏と並んで南奥に重きを為していた。

石橋氏の居城は、住吉城と塩松城の二つが本城として存在する。両城は口太川を挟んで東西に隣接しており、蛇ヶ淵の渡しや幾つかの小橋で連結している。そしてそれぞれ東の新殿、西の小浜などの城砦に向けて街場が展開され、本城を中心とした防衛圏とでもいうべきものを形成しており、重臣の居館の多くがその範囲に收められていた。即ち両城は、周辺部も含めて広大な一つの城域、それぞれを曲輪・出城という位置付けとして把握することができよう。

大内定綱は天文十五年（1546）、塩松の小浜に生まれた。父

は石橋式部大輔尚義の筆頭家老、小浜城主備前守義綱。母は常州太田城主佐竹義篤の娘という。幼名は大阿弥丸。幼くして才気が走り、性は淡白にして礼を重んじ、大声を出して騒ぎ立てるようなことがないが、かといって沈鬱な風情もなく、いつも気付くとその場の空氣に馴染んでいる。一方で怜俐な面を持ち、親しい朋輩や近習の些細な誤りであつても厳しく咎め立て、自ら裁くことを快しとする趣もあつた。

大阿弥丸の名は、石橋家が篤く帰依している時衆に因る。

天文初頭、尚義の父先代定義は隠居後入道して静阿を名乗り、居城住吉城域に十願寺金山道場を開山、塩松に於ける時衆の根拠と為した。その影響によつて、嫡男の尚義はもとより、家中諸士に至るまで時衆を嗜んだ。何阿、何々阿という名を好むのは、時衆の特徴である。即ちそれが大阿弥丸の命名となつた次第で、石橋家中ではこれまでもしばしば用いられてきた幼名である。

隠居後も大御所として内外の政事の中心に居座り続けていた定義が天文十四年に死ぬと、当時その筆頭家老の地位にあつた義綱の父義生も後を追つて腹を斬つた。

かくして、慌しく政権の世代交代が遂げられ、前もつて尚義付きとなつていた義綱の時代がやつてきたのである。そんな中での嫡男の誕生は義綱にとつて、政権掌握に花を添える、洋々たる未来を約束するものと感じられたに違いない。

しかし、時代はその祈りとは反対に混迷の一途を辿り、やがて塩松にも暗い影を落としてゆくことになる。

当時、巷では伊達稙宗・晴宗父子の相克、所謂「伊達天文の乱」が南奥羽全域を席巻していた。

この擾乱は、天文十一年に晴宗が稙宗を当時の伊達氏本拠西山城

に幽閉したことが、発端となっている。父子不和の原因は様々取り沙汰されているが、争乱に至る直接の原因は、植宗の三男時宗丸が越後国守護上杉定実の養子となるに当たって、植宗がその護衛として精兵を多数付けようとしたのに対し、晴宗が異を唱え入嗣自体を阻止しようとした為とされる。

晴宗の思惑は一応遂げられたものの、事態は思わぬ方向へ進んだ。幽閉されていた植宗はその寵臣小梁川日雙によつて救出されると、周辺諸氏の協力を得て反撃に転じたのだ。

伊達家中には晴宗を支持する者が多かつたものの、周辺諸氏の多くが植宗を支援したことから、開戦当初は植宗党の勢力が晴宗党を圧倒していた。その主勢力となつていたのが、田村隆顯・懸田俊宗・相馬顯胤といった植宗の女婿達や畠山家泰・義氏兄弟・石橋定義などである。この中でも老練な定義は、所領が彼らの中心に位置することもあって、諸勢力間の連繫を取り持つて糾合するのに大きな役割を果たしていた。

しかし定義の死後、残された尚義に父の代役は果たせず、植宗党の足並みは次第に乱れていった。そこへすかさず晴宗が内応の手を差し伸べたものだから、諸氏家中内部で対立関係が生まれ出した。各々自領内の平定に力を尽くさねばならぬ状況となり、植宗への協力を控えざるを得ない者が多くなる。その為、元々伊達家中では支持者の多かつた晴宗の方へ、一気に流れが傾いていった。すると諸氏の間でも、その動きに敏感に反応した者から次々と鞍替えしてゆき、その傾向に拍車を掛けた。

塩松でも、義綱が中心となつて早く晴宗支持を表明、「父の遺志を尊重して植宗党に固執する尚義へ否を突き付けた。そして次々と家中諸士を糾合していつて主君の手足を奪い、最終的に尚義に晴

宗と諱みを通じさせることに至った。

この騒乱は結局、同十七年秋に至り、足利將軍からの重ねての和睦命令に従つ形で終結を迎えた。但し、終結したのは父子相克のみであり、そこから派生していた数多の対立関係は、その後も延々と続くことになる。

この争いが奥州に於ける戦国時代の皮切りとされる所以である。

その中で大阿弥丸は、僅か安達半郡の塩松を守る為に汲々とし、ときには下手な謀略にまで手を染めている父の姿を、鼻先しか見えぬみみつちい男として他山の石と見なしながらも、心の奥底では本人の気付かぬ内に鏡として培つていた。

暫くして好い日を選び、大阿弥丸は塩松城へ遷ることになった。

小浜城を出るに当たつて、父義綱が言った。

「其方がこの家を出、主家の養嗣子になつたとて、儂の子でなくなつた訳ではない。父親が一人になつたと思うがいい。今後は一層自らを律し、塩松殿の後嗣たらんとせよ」

尚義が穢やかな人柄であるだけに、義綱は息子が甘やかされるのを懸念しているようであったが、大阿弥丸にしてみれば甘やかされたとてそれに溺れない自信はあつたし、今後この父の束縛から解放されることに心が浮き立つばかりだった。

兎も角も大阿弥丸は、かくして塩松城に入った。そして日を選ぶと、同地にて元服を執り行い、太郎左衛門斉義と名乗つた。

かつて尚義の先代定義は、嫡男尚義に跡目を譲つた後も大御所として住吉城に君臨し続けていた。その為、尚義は当主となつた後も、それまで数代の間一の丸的な位置付けとなつていた塩松城に差し置かれていた。

だが尚義は、定義の死後も継続して塩松城に住み続けたことから、逆に住吉城は一の丸、或いは大奥的な位置付けとして扱われるようになつていた。

斉義は義父に随つて塩松城に部屋を与えられたが、内心は住吉城の方が居心地が良く、こちらに居を取りたかった。

その理由の一つとして、住吉城の書庫には埃を被つた蔵書が沢山あり、斉義はそれを使う存分に読みふけりたいというものがあった。

城内は人も少なく、また一人の父にかまわれることもなかったことから、一人を満喫できる、落ち着ける場所だった訳である。

斎義は、志保姫との婚儀を済ませ、初めてその姿をはつきりと見た。

かなりの痩せぎすで、髪も多少くせつ毛はあるが、思つていたような醜女には見えず、肌も白いし目鼻立ちも至つて普通の女だと感じた。ただ、話をするとき少しでもりがあり、知性の面でも父親を受け継いだのか向学心といったものは余り感じられず、斎義が改めて興味を惹かれる部分は別段なかつた。

さりとて斎義はこの頃まだ女色の経験がなく、その方面的欲望もさほど強くないということもあるのか、彼女に対しては別段の不満を持たなかつた。ただ知識として、「これが醜女である」と頭に詰め込まれただけのことである。

何にせよ彼女の存在は彼にとつて是も非もなく在るものであり、「ひついうものだ」以上のものにはなかなか昇華し得ないものだつた。よつて暫く経つてからの初めての床入りの後になつても、その感覚は当面改まらなかつた。

姫の方でも、自分のよつた容姿が醜女であるという知識を持つてゐるのか、深い情を斎義に求めることはなく、よつていつまで経つても子を成さなかつた。尤も、貧弱な彼女の肉体で子供を宿せるのかといふことは、甚だ疑わしいものだが。

互いにそんな状態では、とてもすぐに睦まじい関係が築ける訳もなく、斎義が時折通つたぐらいでは、なかなか会話が弾むようにすらならなかつた。

それでも斎義は、姫のところへ定期的に通つた。それは新婚としては極めて少ないものだつたが、双方から不満の類は一切出てこな

ことから、画家の父母とて何も口を挟めなかつた。

数年が経つた。元号は永禄（1558～70）に代わっている。

斎義を乗せた馬は領内を駆け回っていた。すぐ後には数騎の供が付き随つている。

主要道は元より、裏道細道はおろか獸道に至るまで、塩松中の道という道を彼らは既に精通していた。

道の傍らで農作業をしている領民達は、彼らが通り掛かるとニッヒリと微笑んで頭を下げる。彼らは領民からの評判が良かつたのだ。

斎義が主家に入嗣して以降、領内武士団の特に若衆が皆、彼を鏡と為したことから、自動的に綱紀肅正が行われ、全体的に質が向上した。その結果、斎義へ領民の感謝が集まつた次第である。

勿論、初めからそう巧く行つた訳ではない。

入嗣間もない頃の斎義は供を連れることを嫌い、単騎で遠駆けなども平氣でしていたものだった。それに対しても周囲は、頻りに軽挙と諫め、供を具すように言つた。

だが斎義は、斯様な心遣いは却つて迷惑だった。

家臣たる近習らは、万事体裁を気にして遠慮するものだから、気分がだらけて一向にのつてこない。加えて斎義の方でも、近習に気を遣わせまいと逆に気を遣つてしまつものだから、無駄に疲れるのだ。

そこで千思万考の末、少しでも気を遣わずに済む親族を近習の中心に据え、重用することにした。第一が助右衛門親綱で、第二が長門義員である。

親綱は斎義にとつて、腹違いではあるが同年の弟である。

幼い頃から何故かこの取つ付きにくい兄を慕い懐いており、元服して義綱の新たな後継候補の筆頭となつた後も、毎日のように兄の許を訪ねては付いて廻つてゐる。

斎義も、彼のことだけはどんなときでも邪魔に感じないことから、これも彼の能力と思つて評価し、父達が何も言わない限り好きに居させた。

周囲からはよく似た兄弟と媚びた声も喧しかつたが、そう言われるに何だか彼に申し訳ない気がして、逆に気が重くなつた。

周囲によく気を配りよく笑う、人懐こい性格から、家中の皆に好かれた。

長門は義綱の従弟義円の子である。

幼い頃から、信夫・伊達を中心に行はる山伏となつてゐる父に従つて、山を棲処としていたのだが、斎義が尚義の養子となる祝いに訪れたときに、お付きの者として請われ還俗し、小浜城下に屋敷地をあてがわれていた。

その出自の故か気性は荒く、斎義を主筋と敬う姿勢も少なかつたが、斎義にはそれが却つて心地良かつた。

それに、彼は山を熟知しており、一緒に遠駆けをしていても得るもののは多かつた。よつて斎義は、彼のことをある程度敬意を払つて接した。

元々の粗暴な振る舞いや性格が改まることはないものの、龍を驕ることもなく、農繁期には野良仕事の手伝いにも進んで精を出している。その故に領民や仲間内から特に好感を持たれた。

この二人を近侍させるようになつてから、他の者の斎義に対する態度に少しづつ変化が顯れ出した。つまり、二人を緩衝として御前にてもそぞろに振舞うようになり、更には一人を参考として自然に

接するようになつていつたのだ。

だから本当のところ領民達は、彼ら一人に感謝すべきなのかも知れない。

城に戻ると、馬場まで尚義の小姓が迎えに来ていた。

「大殿がお呼びでござります」

斎義は馬番に手綱を預けると、足取り軽く義父の許へ向かつた。

案の定、尚義は斎義に甘かつた。

待望の後嗣であるから致し方ないとはい、ねだられるままに、否、ねだられずとも、ねだられたもの以上に、贅を尽くした馬具や当世具足、更には当時まだ奥州では珍しい鉄炮まで取り寄せたりと、金に糸目を付けずに買い与えていた。

「お呼びですか」

尚義はいつにも増して上機嫌に、入室してきた養嗣子を迎えた。

石橋尚義は世間では暗愚と蔑まれていたが、義綱を始めとする重臣がよく補佐しているのか、決して家中や領内が乱れている訳ではなく、戦乱の打ち続く他領に比べれば寧ろ平穏だつた。

ただ確かに尚義は斎義の目から見ても、能力的に恵まれているようには映らなかつたし、自己を高めようという野心が強いとも感じられなかつた。

ただ、無闇に周囲へ氣を配り、民や家中を勞わろうという気持ちだけは強く、愚よりは鈍の方が当たつていると内心思つていた。

側女の酌で赤くなつた顔を弛緩させ、手を付いて挨拶した斎義に新しい盃を渡すと、手すから酒を注いだ。尚義は決して上戸ではないが酒好きで、呑むと途端に饒舌になる。

斎義は話が長くなる覚悟をした。

「お」との初陣が決まつたぞ」

尚義は口を付けた盃を一気に乾すと、両手を胡坐の膝にあてがい、

神妙な顔で義父を見つめた。尚義が続ける。

「伊達家の騒動は、おとも聞いておらつ

「……はい」

南奥の戦国時代は、やはり伊達氏の動向抜きでは語れない。

永禄初年以降、伊達晴宗は惣領の座を保有したままで、実権を後嗣総次郎輝宗へ徐々に移行させてゆき、自らは羽州米沢から信夫郡杉田へ遷つて、伊達氏の本貫から周辺へ目を光らせるようになつた。

これは、晴宗が当主となつた際に伊達郡西山から米沢へ本拠地を遷して以降、当地方に相馬氏や畠山氏を始めとする他氏から侵略の目が向けられるようになり、周辺の伊達麾下諸将にも不穏な空気が漂い出していたことに起因する。

その一連の動きの中でやがて、伊具郡北部の伊達一門田手宗光に、相馬を後ろ盾にしていると思われる謀叛の嫌疑が掛けた。

それに対し、輝宗が中途の刈田郡まで出兵して弁明を受け付けたところで、晴宗は「軽挙を避けるように」と輝宗に諫言すべく、伊具郡境の石母田まで出張つた。

このとき、晴宗出張の報に接したその老臣中野宗時が、勝手に主不在の米沢にて防備を固め、事態の推移次第では宗光と共に謀して輝宗を挾撃しようとしているのではないかと思わせる、疑わしい動きを見せた。

輝宗はこれを一連のはかりごとと判断し、晴宗に対しても不審の目を向けるようになる。身の危険を感じた晴宗は伊達郡東根の保原まで退き、周辺諸氏に籌策を求めた。

現況は、今後の展開次第では、天文以来の大乱にまで発展する危

険を孕んでいた。

斎義は「この事態に關して、尚義の意向に對し家中諸士が「こぞつて出兵反対を主張している」とまで知っていた。遂に尚義が我意を押し切つたのだと察すると、気が重くなつた。それが神妙な顔の意味である。勿論尚義は氣付かない。この後嗣は自分に異はなかろうと信じじきつていてるかのようだ。

「伊達殿から是非にと請われては、どうして断れよ?」

「義父上が私を伴い伊達殿の處へ赴くのは、承りました。されど……これは戦さを避ける為のものであつましょ?」

「それは勿論だ。名田上は和解籌策だが、当地へ赴くに当たつ、三十騎ばかり出張ることとした」

「何も御身が直接に出張らずとも……。書簡にても用件は果たせるのでは?」  
「なぜ?」  
「三十騎とはいえ諸士準備に追われることにもなり、出費も無駄に嵩みましょ? また此度の伊達家の騒動、あまり他家の者が口を挟む類のものではないのでは?」

「お」と自身は、自分の初陣を如何思つておる。勿論、戦さにならぬが最善ではあり、戦陣を田の当たりにすることはないかも知れぬが、場の雰囲気を知ることははできよ?」

「私に晴れの場を設けてくれよとする義父上のお気持ちは有り難く、また嬉しく感じております。今後行く末を思えば、伊達家中に顔を売る効果もありましょ? れど……」

尚義は満足そうな顔をして、斎義の言葉に割つて入つた。  
「そもそもおひつともあひつ。お」となれば、そつと聞いてくれると思つた

そして尚義は、このとこりの酒を呑むと毎度口癖のよつて語つて聞かせる話を、ここでも繰り返すのだった。時折れつが廻らなくなるもの、いつも言つてゐる文言だけに、言葉の選択が次第次第に洗練され、まるで何かを讀んでいるかのようである。

「かの天文の大乱の折、諸家中面従腹背にして叛腹常ない有り様だった中、ご先代の塙松のみは平静を保ち、伊達家の和睦調停に重きを為しておつた。されどご先代は志半ばにして病に斃れ、残された儂は若輩にしてその能力ご先代に及ぶべくもなく、大乱は当家中にまで漫食されることとなつてしまつた。今度こそ伊達家の内紛を調停しおおせ、ご先代の遺志を貫かん」

尚義はそこまで一気に言つと、満足した顔で盃を口に運んだ。

義綱らも、尚義にそつと言われては、そもそもあのときに主君へ否を突きつけたという後ろめたさがあること故、重ねての反対はできなかつたことだらう。

齊義も、これ以上何を言つても効果のないことを悟つた。

日を選ぶと、尚義は留守を義綱に任せ、ものものしく出陣した。

一行は塩松を出ると、川俣を経て月見館へ至った。

伊達郡内では広瀬川の流れに沿つて北上する。即ち、三春方面から塩松・川俣・懸田を経て梁川で仙道の本街道と合流する、「小手道」と呼ばれる南奥州を縦断する脇街道として古来重要視される道である。

川俣領主桜田氏は伊達氏の麾下ではあるが、比較的自立性が強く、周辺の領地は自治領となつていて、よつて、川俣・懸田の中間点に当たる月見館の地峠部から、本式に伊達領となる。

天文末年に晴宗が当地方の領主懸田俊宗を滅ぼす以前から、当地は要衝として重要視されており、伊達治下になつてからは更に新たな城砦や関所が築かれ、街場も大きくなつていた。

その理由は勿論、塩松への警戒ということもあるにはあるが、それよりも相馬に対する備えとしての色が強い。

即ち、月見館南北麓から東へ向けて、海道まで通じる二筋の分かれ道が走っているのだ。いずれも相馬軍による伊達郡遠征の際に通り道・関門とされ、天文の乱当時も、行方郡の小高を本拠とする相馬顯胤の軍勢が幾度となくここを通り、懸田氏の助勢に駆けつけている。

相馬氏は、乱終結後間もなく急病に斃れ天折した顯胤の跡を、若年の嫡男盛胤が継いでいた。爾來暫く、盛胤は自領内の統治に力を注がねばならぬ状況となり、それは晴宗が懸田討伐を容易に成し遂げ得た要因にもなつていた。

尚義一行が小手道を北上すれば、月見館本館は右手に現れる。

それ自体は小型の山城であるが、周囲は塩松の中心地にも劣らぬ活況となつており、川俣以降人の往来も増えていた。

これが伊達領の南限の一関門であることを併せ考へるに、斎義は伊達家の規模の大きさに打ちのめされる思いがした。

その様子に気付いたのか、尚義は気分良さそうに馬に揺られている。

一行は関所通過後、懸田から小手道をはずれ、保原城へ至つた。ここまでが一日の行程である。

当城は晴宗の功臣中島伊勢の居館である。現在の流れとは離れたが、当時の当地は阿武隈川の氾濫原上に存し、川から導水して堀を為し、曲輪を形成する平城としてあつた。

尚義と斎義は、この城内で晴宗に対面した。

「これは塩松殿。」足労いただき恐縮」

「我らにできることあらば、何なりと申しつけくだされ」

斎義は一人の様子を窺つている。尚義は幾分緊張が表情に出ているようだ。

晴宗は口元を小さく歪めているが、どうやらそれが喜んでいる表情らしい。それどその造作は、鋭く厳しい口つきともあいまつて、神経質な性格をよく醸し出していた。

「輝宗は些か猜疑が過ぎるようだ。気持ちは解らぬでもないがの」と、言つますと

輝宗が警戒しているのは、今伊具郡で起きている騒乱そのものだ

けではなく、その処理如何によつては領内のどこまでも飛び火し得るという家中の統治体制にある。

今回、田手宗光への対応が余りに寛大な処置では、家臣達は皆、主家を甘く見るようになるだろうと考えているのだ。

現に中野宗時の動きは余りに輝宗、延いては主家を蔑ろにした行為であり、晴宗の意を受けたものでは勿論ない。

晴宗はそれを承知しながらも、長い間苦楽を共にしてきた重臣達をただ見殺しにする訳にも行かなかつた。

また、輝宗の意見通りに締め付けを強めれば、家中諸士の反発を招き、家が四分五裂してしまうやも知れないという懸念もあり、ずるずると斯様な状況へと落ちてしまつたのだ。

この状況を正しく理解していれば、晴宗とて始めから尚義に調停そのものを期待などしていないと云ふことは、判らうるものだ。

即ち、現在の伊達家中を元の鞘に收められる者は、一人しかいな  
い。

「塩松殿には、丸森まで行つて貰いたいのだが……」

尚義の表情に一瞬緊張が走つた。

「すると、円入殿に仲介の労を執つていただこうとこつ訳ですな」

晴宗は石母田から伊具入りしようとして、輝宗から鉾先を向けられた。

そこで、尚義に伊具入りして貰い、同郡丸森村で隠居している植宗に仲介を頼もうという訳である。

人畜無害な尚義なれば、輝宗とて何の謂われもなく攻撃を加えることはあるまい。

植宗は天文の乱の和睦条件に従い、丸森を始めとする周辺五箇村を隠居扶持としてあてがわれ、その後入道して直山円入を号していた。

伊達家政の表舞台から遠ざかつて暫く経つが、家中諸士及び周辺諸氏への影響力はまだまだ保つてゐる筈である。殊に相馬氏とは乱後も引き続き懇意にしており、これ以上の適任者はいなかつた。

漸く話が通じ安心したのか、晴宗は斎義を向いて表情をほんの少し緩めた。それでもその視線は、慣れぬ斎義にとつてまだまだ威圧を感じるものであつた。

「そちらが太郎殿じやな。噂に違わぬ面構えをしている」

斎義は油断していた。突然に話を振られたことに動搖し、晴宗の視線に思考能力を奪われ、何と答えてよいやらまるで言葉が浮かんでこない。

しかしそこへすかさず、尚義が嬉しそうに話に割つて入つた。気付けば、当初の緊張はもつっかり散じている様子である。

「伊達殿の推挙がなければ、手持ちの人材に気付かぬところでした」

「暫く見ぬが、備前は元気でしょうな。当方が落ち着いたら、どうか一度遊びに遣わしてください」

斎義は、晴宗が言った自分に関する「噂」とは如何なる噂か、婿入りの話を自分に持つてきたときの実父備前義綱の表情と併せて、気になった。

天文の乱の折、稙宗党だった尚義を晴宗党へ導いたのが義綱である。

当時から義綱は伊達通となつており、殊に晴宗の塩松番となつていた石母田安房とは懇意にしていた。

安房は塩松訪問の際には小浜に幾度も宿泊しており、斎義も幼い頃からよく見知つていた。その辺りの筋から、自分に関する何らかの情報が伊達にもたらされ、婿を探している尚義へ推薦するという過程があつたのだろう。

また、斎義の弟親綱の室も、この筋を経由してあてがわれている。中野宗時の娘がそれである。

晴宗は表情を動かすことは殆どなく、媚びるよつに明るい表情を「口口口口させている尚義とは対照的だった。

翌日、一行は晴宗から預かつた書簡を携え、丸森に入った。

丸森城は、阿武隈高地の北辺から西へこぼれた突端部に位置する山城である。

麓を南から西を経由して北へと、本丸を三方から囲繞するように内川が流れ、阿武隈川へ注いでいる。城は西側の川に突き出た曲輪

を頂点に、東へ連なる梯郭式となつており、古来伊具郡の中心として、そして阿武隈廻船の中継基地として、栄えてきた場所柄である。

尚義の表情は、保原を出たときから緊張でこわばつたままだった。晴宗と会つたときの比ではない。

植宗と晴宗はとうに和解しているとはいえ、寝返つた尚義にとっては、やはり依然として余のつのひばつ悪い相手ではあった。

植宗は、白銀の総髪に袈裟をはおり、穏やかな表情で一行を迎えたが、その所作はすっかり老爺の趣となつていた。

「塩松殿、久しいのう。そちらがお嗣子か」

尚義は、植宗の優しい言葉にすっかり恐縮し、「あの」とか「はあ」しか発せないでいる。それを差し置いて斎義は、保原での失態を挽回するように、意気込んで挨拶した。

「お初にお目にかかります。太郎左衛門斎義にござりまする」

「つむ。利発そうな若人じや。当家の総次郎殿とは、歳も近からう。相馬の孫次郎殿と同年くらいかの。どうか皆、末永く仲良うして欲しい」

相馬の孫次郎とは、盛胤の嫡男義胤のことである。相馬氏と懇意にしていた植宗は、丸森に遷つてからも一層相馬をいたわり、末娘を義胤に嫁がせている（後に離婚する）。

尚義は、植宗と斎義の会話で漸く少し緊張がほぐされ、用件を伝えた。

「保原より書簡を預かって参りました」

植宗は受け取った書簡に目を通した。

「総次郎殿は早熟じや。若氣の血氣につかされて足元をすくわれぬよう、儂からも一寸言つてやらねばとは思つておつた。……ところで塩松殿、御辺らはこれから何処かへ攻め寄せようといつ趣向かの」「えつ。いや、あの……」

塩松城を出たときから尚義は大鎧、斎義は当世具足を身に着け、他の武者も胴丸・腹巻を着用、すっかり臨戦態勢を整えている。保原で一泊して状況が大方見えてきても、尚義が総武装を解かない以上、諸士もそれに追随せざるを得ず、連日軍容を調べての行進は行列の全員が負担に感じていた。

「助力を請け負つて貰えるのは有り難いが、そのなりでここに居られては、却つていらぬ混乱を招きかねん。通達の旨は承つたので、早う戻つて晴宗へ伝えてくだされよ」

尚義の顔は赤くなつて、再び固まつてしまつた。

一行はそのままとんぼ返りで丸森を発つと、途中再び保原にて晴宗と面会、城下で一夜を過ぐし、翌日往路と全く同じ道を辿つて塩松へ戻つた。

結局、この混乱はその後も収まらず、収束まで数年を要す。

晴宗は混乱が終結したら輝宗に跡目を譲るとし、輝宗は現況のままで跡目を継ぐことを望んだ。

問題は、中野や田手といった旧来の重臣が輝宗を蔑ろにして家政を牛耳らうとしている、という疑いがあることである。

晴宗が何とか穩便に済ませたいと輝宗に寛恕を求めて、輝宗は誅伐を主張して譲らなかつた。しかし、まだ正式の当主になつていなゝ輝宗の手勢だけでは、それらの勢力を討伐することも叶わない。

この間、稙宗はずつと和解への道を探り続けていたが、その道は開けぬままに体を壊し、枕の上がらぬ身となつた。

結果、これを機として父子は漸く互いに歩み寄りを見せ始める。

そして、田手氏の家格を一門から一家に下げて所領も減封するが、

他には手を出さない」という条件を輝宗が呑み、正式に跡田が譲られる運びとなつた。

だが、この一応の解決に、稙宗は間に合わなかつた。享年七十八。その逝去は永禄八年六月。輝宗の後継はその後間もなくであつた。

晴宗は、立場は変われどその後も杉田に住し続ける。

輝宗も跡田こそ譲られたものの、中野宗時一派が依然輝宗に出仕せず、家士を代理人として用を足していることに対し、何の手出しありきずについた。

因みに、この宗時の家士の名を遠藤文七郎といつ。

結果として宗時はますます増長してゆき、元亀元年（1570）に至つて、遂に輝宗との間に戦端が開かれる。

そして戦さに敗れた宗時は相馬へ逃れ、更に会津へ流れてゆく。この戦さで文七郎は輝宗に内通し、その信任を得、第一の側近としての地位を踏み出すことになる。後の遠藤山城基信である。

結果として尚義の出兵は、直接には殆ど何の役にも立たなかつたが、塩松に戻つた後、斎義は一つの建議をして容れられた。

月見館の威容を目の当たりにした斎義は、これに対応する城砦が塩松側にないことを心許なく感じた。

針道や木幡に城砦はあるものの、それは当地を統治する麾下家臣の持ち城であり、厳密には石橋氏のものではない。

よつて、直轄する北部要衝を築くべきであると主張したのである。

そして選地されたのは、針道郊外の愛石森である。

隣接する白猪森をも取り込んで利用すれば大軍を籠らせることが可能だし、盆地が北に拓けて伊達領境まで見渡せることから、まさに伊達氏の南方経営に対応する堅牢と為すのに相応しかつた。

この要害は早速に繩張りが始められ、小手森城と名付けられる。

斎義はこれを端緒として政事への関与を深め、家中にて高い評価を得るようになる。

次第に面持ちや体格も大人び、周囲の接する態度も一人前扱いするようになつていった。

その為、結果として尚義を蔑ろにせざるを得ない行動も目立つようになり、かつての睦まじい関係は次第に冷えてゆく。

斎義は一層塩松城に屈びりを募らせたことから、尚義に願い出て住吉城内に部屋を与えられ、姫を伴つて遷つた。

そのような状況になつても、斎義は（心中はどしきあれ）形式的には尚義への礼を重んじ、孝を怠らぬよう、気配りに意を用いている。

尚義としても、独自の勢力を築こうとしているのが替えのいない後継者であることを知っていたから、「廢嫡」という波風を立てんと謀る一部の側近の声に難色を示していた。

ただ、酒を呑んで万事を人任せにし、自らは總てを流すことが多くなつていった。

数年が経つた。

この間、養父子の関係は（表面上は）何とか平穏を保つていたが、永禄十年に至り、事情が変わった。

前年尚義は、一人の妾から勧められるままに禅僧の講義を受け、求められるままに堂を一宇寄進した。特段のことをした訳でもなかつたのだが、暫くして加護が顯れる。

その妾が身ごもり、この年の春に男子を産んだのである。

この子供は松丸と名付けられ、母子共に住吉城の奥向きから塩松城に遷された。母親は大河内備中の娘である。

大河内氏は石橋家の家老で、家格では大内氏と同様である。これまで筆頭家老たる義綱の施策を後援する姿勢を貫いていたものの、この一事によつて備中は、義綱への対抗意識を俄かに燃やし始めた。

尚義としても、才氣走るばかりで最早かわいげのない（既に情も半ば失せている）養子よりも、愛らしい実子の方へ心が移るのは自然のことで、寝ても覚めても「お松やお松や」と、それこそ目に入れても痛くないというほどの可愛がりよう。

妾や舅に促される形で、斎義を廃し後継を松丸に据え直す決心をするのに、たほど時間はからなかつた。

斎義は直接にその血を舐われる前から、廢嫡される予感を抱いていた。

このことに関して、養子よりも実子が可愛いという尚義の思いを恨む気持ちはないものの、疎外感は否応なく押し寄せ、今後への不安はどうにも拭えない。

実家に戻されるだけなら良いが、免罪を着せられ誅されてしまうのは御免だし、やはり一度は手にしかけた塩松殿の座をただ空け渡すのも癪だった。

考えた末、斎義は住吉城内に部屋を与えられている尚義の側室や妾数人に付け文をした。尚義に洩れぬようという配慮は勿論、遠からぬ過去に尚義が通つたという履歴の下調べなど、事前の根回しにぬかりはない。言つまでもなく、志保姫にも秘密である。

彼女達の心には、酒乱氣味で老年に差し掛かっている尚義に気兼ねする部分は既になく、いつそ斎義の妾であつたならと願う者ばかりだつた。そしてそれは、そんな側室や妾達の心証を慮つて、いるそれぞれの侍女達も同様だつた。

斎義の許には、日時を書いた熱い返書が複数寄せられた。

そんな中、尚義は無防備にも斎義を城に残したまま、松丸母子を伴つて昨日はこひら明日はあちらと行楽にうつつを抜かして、いる。

また、松丸誕生は禅宗に帰依した加護だとして、十願寺を廃して時衆僧を皆追い出し、その寺領を全て招聘した禅僧達に与えた。領内全域にも触れを出し、殆どの時衆道場は他の宗派に取つて代わられた。

人々の目がそれらのことを向いているその間に、斎義は返書をよこした妾の全員と、それぞれ数度に亘つて情交を結んでしまつていた。

丁度、それまで心の拠りどころとしていた時衆を失い、不安を募らせていた彼女らを慰める、という眞じ口実があつたこともあり、事を運ぶに当たつて障りはあるでなかつた。

斎義は決して捨て鉢になつていた訳ではない。策略あつてのこと

である。

即ち、尚義の酒癖 每晩酩酊するまで呑んで翌朝になると昨晩の記憶がなくなることが多い、周囲から盛んに迷惑がられているその酒癖に目をつけて、将来の再起を目指し、塩松の行く末に混乱を巻き起こすこと種を播いていたのだった。

やがてそれは芽を出すことになる……。

案の定、秋を前に斎義は一方的に放逐され、義綱の許へ返された。少年期から青年期の十年余を、尚義の後嗣として過ごしたことになる。

姫君との間には相変わらず子がなかつたが、離縁させられる「こと」はなかつた。

松丸という後継者があることから、新たに婿を取る必要もないのは当然ながら、大内氏の礼聘を継続させる為の配慮には、尚義なりに気を遣つたのでもある。

斎義から「尚義の後嗣」という資格は剥奪され、斎義が婿として石橋家に入るという形から、姫が大内家の嫁に入るという形になつた訳である。

またその御免料として、尚義から銘馬と十文字の銘槍が下賜された。そして他に何か欲しいものがないか訊かれると、斎義は住吉城の書庫にある蔵書を望んだ。

尚義は「何だそんなことか」と、一部家相伝の物を除いてそれを許可した。

大河内一族を除く全ての家中は、斎義放逐の決定に溜息をこぼした。

これまで家中は皆、斎義が尚義の跡を継ぐことを当然と信じて多大な貢物で誼みを通じ、また斎義が継ぐことで家が隆盛に向かうことを期待していたのだ。

それほどに斎義の評価は、内外に高くなっていた。

「太郎、口惜しからう。儂も今度ばかりは辛抱ならん」

義綱は小浜へ戻つて挨拶に来た斎義を前に、歯軋りして悔しがつている。

されど斎義は、今回の一事で家中が皆心情的に味方となつたことを感じ、また、犯した禁忌を一切暴かれることなく小浜へ戻りおおせたことから、今後の展開が楽しみでならない。そんな気持ちを抑えるのに腐心した結果、知らず通常よりも冷静に振る舞つていた。

「父上、今暫く辛抱なされませ」

そう言つと、歯を見せて口を笑つた形にした。

義綱は口をぽかんと開けたまま言葉を失つていたが、斎義は構わず一礼して退出すると、親綱の屋敷へ向かつた。

親綱は再び大内家の後嗣の座を斎義へ空け渡すことになる。だから斎義も彼に對してだけは後ろめたく、済まない気持ちを感じていた。だが、何と言つて会えばいいのか。あれこれ思いを巡らせど巧い言葉は浮かばず、裏腹に会いたい気持ちから進む歩に考える時間を削られ、まるで考えがまとまらぬままに面会してしまつた。

しかし親綱は、そんなしがらみはまるで感じさせずに、いつもと変わらぬ明るい笑顔で異母兄を迎えた。

「帰りましたね」

思わず口を突くままに戯れ言が洩れた。

「当面、……この顔を毎日お田に掛ける」

「なに、住吉まではるばる会いに行く手間が省けるだけのことです  
緊張が一気に解けた斎義は、大笑いをした。自分でも珍しいこと  
だと思つた。

すっかり気分が楽になったところで、斎義は志保の許へ戻った。外出もまれな深窓の姫君は、駕籠にほんの短い間揺られただけで具合を損ね、小浜に着くや義綱へ挨拶もせぬままに床を敷いて休んでいた。

斎義が顔を出すと、志保は床から身を起こした。

「少しば楽になつたかね」

「ええ。今からでも貴方の二両親へ挨拶に参らねばなりません。すぐ準備致しますので、少しお待ちください」

「よいよい。そんなものは。これまでと違い、狭い所帯。そのうち嫌でも顔を合わされることになる故、何も気にすることはない。志保のことは話しておいたから、今日はこのまま休んでいい」

志保は「でも」と躊躇つていたが、やがて斎義に従つた。そして俯いたまま、斎義に侘びを語つのだつた。

「私も再三父上には申したのですが。一度決めたらなかなか他人の言つことを聞かぬお人でありますよつて、貴方には何とお詫びを申してよいやら」

「何のことだ」

「『塩松殿』の名跡は貴方が継ぐのが相応しいとは、家中の誰もが、奥向きの者にすら異存のないことでありました」

斎義は「何だそのことか」と氣にも留めない風であつたが、ふと意地悪そうな目をして凄んでみせた。

「追つてこの儂が主家を滅ぼし塩松殿を篡奪すると言つたら、其方

は如何する

志保はまるで落ち着いたままである。

「父尚義を、また松丸君を塩松殿たるに足りぬ器量であると、『自身を塩松殿と自認して周囲もそれを認めるならば、是非ともおやつなされ。それがお家の安泰となりましょ』」

斎義はこのところ、志保の成長に目を見張っていた。

身体的なものや知識ではなく、人間的な。つまり、会話をしていくて気がストンと楽になるときがあるのだ。

本気とも戯れ言とも取れる危うい会話でも斯様に気楽に話せるのは、彼女の気持ちの大きさが受け皿になつていてるからだと、斎義は感じていた。

結婚して十年、漸くのようすに打ち解けてきた夫婦は、一つの束縛から解き放たれ、この後速度を増して親密になつていく。

斎義は微笑んだ。

「志保が塩松殿の系譜を途絶えさせぬことを望むのなら、そのように心得よ」

志保も曖昧に微笑みを返した。

それからの斎義は、尚義から下された十文字槍にて鍛錬を重ね、馬で塩松中を僅かな供を連れ、時には単騎で駆け回つて過ごす日々だった。供の面々も、それまでと殆ど同じである。

即ち変わつたことといえば起居の場を遷したことだけで、斎義にしてみれば却つて快適な生活である。

放逐の事情はすぐ一般領民にまで知れ渡り、斎義は彼らから一層慕われた。

斎義も、それらの態度の多くが同情からるものだと気付いていた

が、そんなそぶりはおくびにも出さず、只管に人の好い若様を演じている。

義綱の怪訝な表情だけが時々煩わしかつたが、口を挟んでくることもないことから、気付かぬ振りをして放つておいた。

斎義放逐から暫くして、尚義妻に再び懷妊の報が出た。今度は百目木城主、石川摂津綱政の娘である。

石川氏は常陸国境石川庄の庄司の庶流で、古来塩松地方の土豪として勢力を張り、中央から塩松へ下向していく諸名族の麾下となることで家を保つてきた。

よつて石橋家中での家格こそ低かつたが、この摂津は持ち前の社交性と周辺諸氏に名と顔が売れていることによつて、家老並に推挙されていた。

居城百目木城は塩松東南端にあり、その支配領域は相馬領と田村領に接している。即ち石橋家に於ける両氏との関係の構築維持は石川氏に委ねられ、石橋家中の相馬番と田村番を兼ねていた。

尚義がこの歳になつてからの俄かに続く妻の懷妊に対し、不審の噂も影ではまことしやかに囁かれていたが、尚義はそんな声は歯牙に掛けず手放しに喜んだ。

義綱は焦る心に唇を噛む日々を続けていたが、斎義は平然としており、時に父の名代として塩松城に出仕しては、過去に尚義の養嗣子としてあつたことなど忘れたかのように、臣下の礼を以つて伺候したりしている。

その姿勢は多くの者に感銘を与えた。

尚義も、放逐後の斎義の潔さに感心し、昔の如くとまでは行かずとも、再び好意的に接するようになつていつた。

翌年の春を迎えると、尚義は松丸を伴い、大河内氏の実家宮森城

内の塙松神社へ宮参りすることになった。昨年の誕生以来、何度も私的には参詣していたが、今度のは公的意味合いが強く、大規模なものだった。

大河内家の本拠宮森城は、小浜の南隣、小浜川の西岸に立つ小型の山城で、南大手、北搦手、南から西麓に掛けて小さな街場が形成されている。

神社は城域の北曲輪に位置する。前九年の役の折、源頼義の臣伴助兼が尊信する宇都宮慈現明神を勧請したのが縁起で、大河内家はこの神社の宮司職も兼ねている。そもそも宮森の地名もこの神社に因っている。

参詣を二日後に控えた午後、斎義は出仕から戻った義綱へ声を掛けた。

「父上、内密のお話が」

斎義は今回の参詣を一つの好機と捉えていた。

義綱の方でも何やら思うところがあつたようで、重く頷いた。黙つたまま連れ立つて奥の間に入り、人払いして対座すると、義綱の方が先に口を開いた。

「百目木を抱き込もうと思つ」

義綱の視線が斎義を刺した。

斎義は一瞬目を合わせたが、すぐに落ち着きなく顔をそむけ、ただ頷いた。

義綱の言葉は、斎義の考えと同じだった。だが義綱のよつた殺氣立つた目をしていたら、誰でも不審に思うだろう。

内密に重大な話をするときこそ、何気ない仕草をするべきである。斎義は（父は斯様な謀事には合わぬ）と、少々げんなりした。

「父上は直前まで、表立った動きは為さぬ方が良いでしょう。今晩、私が百日木まで行き、話を付けて参ります」

「何か書こうか」

齊義は頭を振った。

「口上のみの方が、後々安心です。万事お任せあれ」

齊義は、父の関与をできるだけ少なくした方が巧く行くと判断し、そこまで話すと早々に座を立つて多くを語らなかつた。

その夜、齊義は単身、搦手から徒步で外出し、百日木城へ向かつた。馬で行つたらどうかと義綱に勧められたが、断つた。

「馬は音を出しますし、できることなら家人にも内密の方がよろしいでしょ?」

塩松中に顔が知られているだけに、注意には万全を期す必要がある。齊義は、勝負の大半は今夜中に決すという覚悟でいる。

家中にて齊義の外出を知っているのは、義綱と搦手の門番のみであつた。

一刻ほども掛けて、斎義は漸く百目木城に着いた。  
道中幾度か物音に身を潜めたが、何とか人目に付かずに済んだらしい。

出てきた門番は、訪問者を見るとすぐにそれを斎義と判別した。  
斎義の側でも、何度か聞き覚えのある声からすぐに相手が誰かを特定した。名は知らぬが、何度か会つて挨拶程度の話をしたことのある下男である。

「これは小浜の若君。如何なされましたか  
「折り入つて摂津殿に相談があつて参つた。内密にお取り次ぎを願いたい」

斎義は「内密」の部分を強調しながらも、声を潜めて言つた。

門番も小声になり、両手で制するような仕草をした。  
「暫しお待ちを」

門口にて言葉通り暫く待つと、再び同じ男が顔を見せた。  
「お待たせ致しました。他の番衆を説き伏せて、若君のことを他に知られぬよう根回しをした上で、大殿に直接伺いを立てて参つたので、思わぬ時を喰いました」

「手間を掛けた」

城内に入ると、なるほど、途中の門や通路には一切人影がない。  
本丸に至つて前庭から中庭へ抜けると、一つだけ灯りの点つた部屋がある。

門番はその部屋の前の縁に手を付くと、小声で中へ声を掛けた。

「お連れしました」  
そして斎義を促して下がつた。

障子戸を開けると、一本の燭台の側、目的の男が寝巻き姿で一人正座をして待つていた。

光の具合が、いつもはにこやかな面相が、目つき鋭く感じられる。

「夜分に恐れ入ります」

「いや、夜分にしかできぬ話もあるものですね」

「……先ずは、『ご息女の懷妊、おめでとう』がります。もし男子が産まれた暁には、尚義公の後嗣となられましょう」

「松丸君が居られるのでは、ないかな？」

「大内では一族を挙げ、石川殿のお手伝いを致す所存」

部屋の光度に目が慣れてくると、摂津が光の具合などではなく実際に険しい顔をしていることが判つた。

斎義の追従に二「口りともしない。ただ一瞬目を閉じて小さく頭を下げただけである。

「それは……。して、備前殿は、否、太郎殿は何をお望みか」

「近く、殿が松丸君を連れて塩松神社へ富参りをすることは、お聞きでしよう。そのとき備中殿が田村を後援として謀叛を起こし、殿を弑し奉ろうとしている、といつ噂がありましてな。あくまで噂、ですが」

「ほお。松丸君の摂政になつて、権勢をふるおうといつ魂胆でもあるのですかな。備中殿も大それたことを。　いやいや、噂が本当なら、ですがな」

摂津は眉尻を下げる、乾いた笑い声を小さく上げた。

漸く上げたその笑い声も、常日頃の優しさは微塵も感じられない。突き放すような、冷たい笑い方である。

そして少しく斎義の目を見つめて黙つた後、全て得心したかのように言葉を続けた。

「 よろしい。承りました。 して、産まれた子が女の子だったら、如何致す所存か」

「 いざれにせよ、松丸君の威勢は多く削がれましよう。後ろ盾なくば、実力で家中をまとめ上げるしかない。それができぬ程度の器量と見定めたときには 」

摂津は断定するように、斎義の言葉を遮つた。

「 それを待つまでもありますまい」

「 されど昨今の田村の威勢を鑑みるに、余り弱みを見せれば付け込まれましよう」

「 寧ろ我らの方から、田村の懐に飛び込んで如何」

摂津は一瞬だけ片頬で笑つた。

斎義は少しだけ安堵の笑みを浮かべた。

秘めていた本題は、開けて見れば相手と揃いのものだつた。だが

その笑みは、相手には呆れて洩れ出たものと伝わつたかも知れない。

この頃、田村庄三春の田村氏は、隆顯が隠居して嫡男清顯が跡を継ぎ、その威勢は最盛期を迎えていた。

即ち、常州佐竹氏の北進に対抗して会津の葦名氏と共同でこれに当たつていたが、その一方で葦名に対しても隙あらばその領地を奪わんと狙つていた。

その後方たる塩松を従えたなら清顯に後顧の憂いはなくなる訳で、内応の声を發せば飛び付いて來るのは必至の情勢だ。

斎義は話の主導権を摂津に持たせ、自分は聞き役に廻った。

「摂津殿貴殿。何か策でもありますのか」

「……お時間は大丈夫ですか？」

「このような場、そう何度も設けられるものではござりぬ。時間の許す限り、私も腹の中のものを總て出してゆきますので、どうかお心に留め置かれますよ」

「お互いにな」

斎義が百目木城を辞したのは、空が幾分白み掛けた頃だった。

「長々とお邪魔致しました」

「つむ。早つ帰られた方が宜しかり」

縁に出ると、先だつての門番が前庭と中庭の間辺りから音もなく駆けて来た。

「多少駆け足になります。なるべく足音を忍ばせてくだされ」

「つむ。では」

斎義は摂津に一礼すると、門番の男に続いて駆け出した。

門番は城を出た後も引き続き山の中を先導し、小浜の郊外まで斎義を案内した。

塩松中を知悉したと思つていた斎義にもまるで知らない獣道ばかりを通りて行くものだから、眼下に小浜の見慣れた街並が現れるまで、自分が何処にいるのかまるで判らなかつた。

終始一人は無言だつたが、別れ際に斎義は、一礼して去ろうとしている男へ、声を掛けずにはいられなかつた。

「待て。其方……名を何といつ」

男は立ち止まつて少しく躊躇つていたが、間もなく小声で応えた。

「小平とお呼びください。今後百目木からの伝達事項は、それがしが承ることのできるよう、お願いしておきます。よつてこれから、繰り返しあ田に掛かることになるやも知れませぬ」

小平は再度一礼すると、音もなく駆け去つた。

斎義は小平のお陰で、何とか日の出前に小浜城へ着くことができた。あれがどのような来歴を持つ男かは判らぬが、あまり詮索せぬ方がよからう。斎義は小平を得体の知れない者と見ながら、その使いをはじき出していた。

搦手から城内へ入ると、門番から伝言を伝えられた。

「先刻より、お父上様が書斎にてお待ちです」

「……まさか、ここへも」

「はい。殆ど一刻毎に。この口上も、直接に命じてゆかれました」

「……」

屋敷内へ入ると、義綱の書斎から光が洩れている。どうやら寝ずに待つていたようだ。

しかし斎義は放つておいて、そのまま寝た。高揚した充実感を害したくなかったのだ。

そして翌晩、斎義は義綱に会いに行つた。

義綱は、昨夜斎義が戻つてから会いに来なかつたことを、言頭にこそ出さなかつたが、釈然としない表情ではあつた。

斎義としては、昨夜の摂津との会話を今ここで全て語つて聽かせることは憚られるが、当面の指示だけはしておかねばならない。

一度、話し合つただけではあるけれども、斎義は、義綱よりも摂津の方が視野が広く、先の展望と対策もしつかり持つていると感じるようになつっていた。様々な話をしながらも、摂津から教唆されることが多かつたからだ。急な訪問にも関わらず、既に全てを諒解していたかのような話し易さも、後から考えれば不自然であり、不気味なことであつた。

「昨夜は如何だつた

「富森参りは明後日でしたな」「つむ」

「……備中殿に謀叛の噂があります。」存知でしたか?」

「初耳だが」

「あるのです。そんな噂が」

齊義は睨まんばかりに父を見つめた。

義綱は意を解したのか気圧されたのか、曖昧な返事をした。

「つむ。」で

「田村を援み、此度の富参りを好機と、尚義公を弑し奉らうとの企みになつてゐる由。そこで、決行か否かを田村へ報せる手立てとして、決行の場合にはその前日に、富森城内から狼煙を揚げて報せることになつてゐるのだ、と言われております」

「何? ならば、明日それが知られる訳か」

義綱は身を乗り出してきた。

「はい。狼煙が揚がれば、それで噂は本当だつたといつことになります」

「そうあつては、注進に及ばねばなるまいな」

「即刻討ち果たすよう、進言を願います。恐らく石川殿も同席して、口添えしてくれるこことでしよう。石川殿はそのとき既に塩松城まで兵を伴つておるやも知れませぬ。我らも万全の準備を整えて事に望まねば、功を立てることは叶ひますまい。明日は私も、予め中途まで出張つておりますので、合図が入り次第、富森の城門へ殺到致します。さすれば第一の功は我らのもの」

「合図とな?」

齊義は薄く笑みを浮かべた。

翌日の午過ぎ、雲一つない晴天である。

義綱は塩松城へ出仕していった。

石川摠津は、百目木から麾下の兵を百人ほど動員して塩松城下に控えさせると、自らも義綱に続いて尚義に謁見すべく、入城していった。

同時刻、斉義は弟の助右衛門親綱を伴い、二十数騎の軍勢を率いて小手道を小浜の街場から南下、富森の搦手へ一町足らずの地点まで出張っていた。

富森城内から盛んに揚がっている薄灰色の煙が、空の青に映えている。

この煙は、明日のお成りに向けて城内の隅々まで掃き清めての焚火であり、本来は何ら他意のないものである。

ただ斉義は、手伝いの人足一人を金で抱き込んでいた。ただ目的は告げずに、焚火へ生木をくべるよう命じたのだ。その為に、矢鱈と煙が出ていたのだった。

「兄上、これだけの勢で城を陥とすとは、なかなかに豪儀ですね」

親綱は斉義と馬首を並べて煙を見上げ、快活な笑顔を見せた。

「まあ、追つて百目木勢も来るだろがな。それまでに勝負をつけられれば、御の字だ。それでな助ゑ」

斉義は弟をそう呼ばつて、躊躇いがちに打ち明けた。

「儂としても其方に側に居て貰つと助かるのではあるが、何分にも頭数が足りぬ。不本意に思うかも知れぬが、富森の街屋敷の方へ廻つてくれぬか」

街屋敷は大河内一家の裏の居住地で、宮森城の西麓、城下の街場に接してある。城の搦手門前から右へ分岐する細道を辿ると、街場に通じる手前に存する。対して大手門へは、城の東側、分岐を道なりに左手へ廻つて行くのが最短である。

「……分かりました。まあ、それもまた必要な役目です。ただし、こちらの方に備中殿が居た場合には……」

「うむ。こちらに遠慮することなく、存分に功を取つてくれ」準備は調つた。

あとはジリジリと父からの合図を待つばかりである。

その時、晴れた空に一発の爆裂音が遠くから響いた。

それは義綱が塩松城の大内屋敷から打ち放つた空砲だった。かねて申し合わせていた合図とは、これである。

斉義が尚義の後嗣としてあつた頃、義父から買い与えられた鉄炮が、思わぬところで役立つた。

奥州では依然鉄炮はさほど多く入つておらず、塩松にもまだ数挺しかない。当時の義父は相当の無理をして手に入れてくれたのだろうと、斉義はあの頃の甘い生活を懐かしく感じた。

兎も角も一行は、それを合図として一斉に駆け出した。

「ではつ

申し合わせ通り、親綱は斉義率いる本隊と分かれ、手勢七騎充当の上下を率いて城の北から西へ廻つていった。

田の前には搦手門がある。門番は何事かと狼狽して出てきたが、目の前で左右一手上に分かれた軍勢が駆け去つて行くのを、口を開けて眺めるばかりだ。

斎義は先頭を切つて小手道を更に南へ進み、大手の門前へ達した。無防備に出てきた門番を一刀に倒し、馬出しを一気に駆け抜けると、城内への上がり段に向かつて更に鞭を当てた。そして南曲輪を蹂躪して北上し本丸をそのまま通過すると、神社のある北曲輪へと突入。この辺り、城の表構造は概ね熟知している。

神社付近には、明日のお成りに向けての準備に、上下士が十五人程度と人足が五十人ばかり来ていた。

「人足は片寄れい」

斎義は大音声を張り上げ、麾下の下士数名へ人足を一箇所にまとめるよう命じた。そして更に神社の境内へ向けて突き進んだ。

この頃になつて漸く戦闘らしい戦闘が始まった。

されど城兵から抵抗があるといつても、平服と総武装した騎馬武者との対峙では、勝負にならない。

「雜兵は構うな。狙うは備中が首のみぞ」  
しかし北曲輪を大方制圧しても、備中の姿が見えない。

報告が入つた。

「本丸主館にまだ多数立て籠もつている模様」  
「よし」

斎義は身近にいる者をまとめて本丸へ向かうことにした。

敵勢の推移を窺うに、どうやら曲輪間連絡の裏通路から多くの者が逃げたようだ。斎義も流石に城の裏構造までは承知していない。

このとき、搦手門の方から喚声が挙がつた。どうやら石川勢が着いたらしい。斎義はその予想外の早さに渋面を作りながら、構わず本丸へ向かつた。

本丸主館の門は堅く閉ざされている。  
反撃の態勢を整えられては、逆に当方の身が危険に晒されてしまう。

無勢にてどう攻め立てたものか考えあぐねている間に、石川摶津が到着した。そして同時に逆方向から、親綱の使いが訪れた。

「太郎殿、遅ればせながら、ただ今参上仕つた」

「なんの。余りの早さに、驚いております。……一寸失礼

」  
音義は親綱の使いから、耳打ちで報告を受けた。

「うむ、分かつた。追つて沙汰のあるまで、引き続き制圧しておくれよつ申し伝えよ」

「はつ」

「如何された?」

「備中殿は恐らくこの中の由。街屋敷を制圧した弟からの報告でした」

「左様か。ならば」

摶津は平生の彼には似合わぬ怒声でいつて、門の中へ呼び掛けた。

「備中殿お。中に居られると存ずるが如何つ」

中から絶叫にも似た、若者の大声が聞こえる。

「その声は石川摶津殿と存ずる。備中が甥、宗四郎が代わつて返答す。こは如何なる所存かつ。斯様な暴挙に出て、上にビリ申し開きをするつもりかあつ」

「こは主命ぞお。其方らの企てし謀略、既に頓挫せり。もはや神妙にされよつ」

門の中がじよめき、更にざわめきへと変ずる。

やがて静かになると、門外では撃つて出るかと緊張が高まつた。ほどなく門内から煙が立ち始めた。屋敷に火を掛けたらしい。

摂津が傍らの下士に開門を命じた。どうやら草調義専門の組頭である。

その下士は、門から少し離れた壇際へ寄ると、指笛で短い韻律を刻んだ。

少しして門の辺りから叫び声が響き、内側から通用門が開けられた。門の中から現れたのは、先日百田木城にて斎義を案内した門番の小平だった。

斎義は彼らの一連の行動を見て、その手際のよさに気味が悪くなつた。それに比べて、自分が人足を抱き込んでさせたことの稚拙なこと。

ともあれ門内へ突入すると、既に炎は主館を崩さんばかりに燃え拡がつていた。

「備中と宗四郎を探せつ」

火の勢いは激しかつたが、それでも摂津の下士が数名、館内へ飛び込んでいった。更に館の裏手に見つかつた隠し通路から、探索の手も伸ばされた。

摂津が何かと先に立つて動くものだから、斎義は手持ち無沙汰に腕を組み、燃え上がる建物を慄然と眺めていた。

後ろから摂津が声を掛けた。既にすっかり相好は崩れている。

「太郎殿、父御がお見えになりましたぞ。どうぞ報告をしてください

れ

「あつ、はい」

共に門から出ると、義綱が馬から下りたところだった。

「見事な機転でござったな。」息も立派に立ち振る舞われておりましたぞ。きっと殿もお喜びになるでしょう」

摂津は義綱に向かつて厭味なくそう言つて、北曲輪の方へ向かつて行つた。「機転」とは鉄炮の件だろつ。

斎義は義綱と共に再び門をくぐつた。

「ただ今、備中殿の屍体を確認中です。また、備中殿と共に甥の宗四郎殿が城内に居た由。その所在も確認中です。街屋敷の方は助右衛門が押さえました」

義綱は斎義の横に並ぶと、炎を眺めながら頷いた。

斎義もまた、何をするでもなく煙を仰ぎ見ている。

傍から見たら何とも間の抜けた光景であろう。斎義は自分らのことをそう思つた。

激しい黒煙は上空で青に溶け、空全体を薄く濁らせている。やがて大きな音を立てて主館が崩れ落ち、熱風が吹き抜けた。顔を背けてやり過ごした後、薄目を開けて見上げると、舞い上がった無数の火の粉が次々と黒い炭に変じてゆくのが分かつた。

暫くして、裏通路を搜索に行つていた者が、北曲輪から斎義の所へ報告に来た。

「両名の死亡、確認致しました。ただ、備中殿が首は見つかりましたが、身体の所在は未だ確認されておりませぬ」

「む？ 状況がよう掴めぬ。詳しく話せ」

「裏通路から北曲輪へ出る手前に、地元でクラベ石と呼ばれる大石があるのでですが、その石の傍らに宗四郎殿の屍体が転がつてしましました。口から背中にかけて自らの太刀にて貫かれており、状況から察

するに、剣先を咥えて石の上から転げ落ちたものと思われます。そしてその腰袋の中に、備中殿の首が入っておりました

「するともしや、この本丸主館へ逃れる前に」

「おやらくは。いざれ胸も見つかることでしょ」

その言葉通り、ほどなくそれは見つかった。

否、北曲輪でとうに見つけられていたのだ。神社拝殿の中にあつた腹を切つた首のない屍体が、衣服や所持品から備中であると結論付けられたのだった。

夜、小浜城に戻った後、斎義は義綱に塩松でのやりとりを聞き取り、また改めて富森での経過を詳しく聞かせた。

「塩松城でのやりとりの様子をお聞かせください」

「うむ……。其方の言うておつた通りに、備中謀叛の眞を言上したのだが、殿は一向にお信じにならない。そこへ摂津が同座し、一言三言、儂と同様のことを申しただけなのに、殿はおもむろに座を立たれ、富森の様子を窺おうと望楼へ向かわれた」

義綱はそれを自分の能力不足と捉えていたが、恐らくそれは違う。尚義の中で蓄積された備中への疑心が、たまたま摂津の言葉で臨界に達しただけのことである。

しかし斎義は、それを義綱に言つて慰めることを潔しとしなかつた。

「狼煙は見えましたか」

「殿は茫然と眺めておられた」

「誅伐の言上は？」

義綱は一度深く息をついてから、話しだした。

「今回のこととで儂は、摂津を見る目が変わった。あれは恐ろしい男じや。あの場で殿は、まさに摂津の言いなりとなつておつた。殿は摂津の言葉を反復するように『備中が首を挙げし者に富森を『えん』と仰つた』

義綱は思い起しそよつて暫し黙つたが、氣を取り直したよつて、逆に問い合わせてきた。

「其の方の方の首尾は如何だつたか」

「軍勢を一手に分け、助右衛門に街屋敷へ向かわせ、私は大手より攻め入りました。殿は形式を重んじるお方。城攻めは大手からが本來であります」

「しかし搦手も開いておつたぞ」

「それは石川殿の所作です。流石石川勢は到着が早かつたですぞ。一緒に出発していたら、大きく置いて行かれるところでした。本丸主館を囲んだのは、僅かに我らの方が早いくらいのものでした」

石川勢の武勇は元々塩松隨一との聞こえが高かつた。それに、石川領たる日山丘陵は、塩松一の良馬の産地である。

宮森城は南大手北搦手だから、小浜城から攻めるのならば緒戦を搦手にするのが便利である。それでもわざわざ大手から攻め込んだところに、斎義は酔つていた。その一方で、石川勢の熟れた動きに対し、これから共同戦線を亘つてゆく仲として、ふとすると一転して危険な存在にもなり得るという危惧を感じてもいた。

翌朝、斎義は義綱に伴われ、塩松城へ出仕した。

城内で摂津も合流し、三人で尚義に謁見する運びとなつた。摂津は一人を見ると、二口一口といつもの笑顔を見せた。だが一人とも、その裏の顔を見てしまつてゐる。義綱と摂津が並んで座り、斎義は義綱の後方に座を占めた。

尚義はいつも増して血色のない顔で現れた。この頃とみに痩せてきて、頬がこけてゐる。それら顔色の悪さも併せて、増え続けている口酒の影響が亮かである。

「大儀であった」

「備中が首は、もう検分されましたでしょうか」

尚義は義綱の上申には答えず、相好を崩して斎義へ声を掛けた。

「大活躍だつたそうではないか」

「恐れ入ります」

斎義は平伏した。

摂津が口を開いた。あくまで明るく、朗らかな口調である。

「今回の手柄は、太郎殿に全て持つて行かれたようなものですな」  
摂津は少し腰を傾け、チラと後ろを見た。二コリとされ、斎義は逆にゾツとした。

尚義も「そつかそつか」と上機嫌になつたが、すかさず義綱が口を開いて、和やかになりかけた雰囲気を断ち切つた。

「備中が首を挙げし者に富森を下されるとのお達しでありましたが、我らの駆け付けた時には既に、甥の宗四郎の手によって彼の首は胴と離れておりました。その宗四郎も自害し果てた今、富森は誰にくだされましょうや」

斎義は義綱の発言を浅ましく感じた。自分と摂津のやりとりに不審を抱いていることは窺えるが、それをあからさまに口頭に出すのはいただけない。

尚義も話の腰を折られ、黙ってしまった。

すぐさま摂津が口を添えて、話の進展を促した。

「何卒、太郎殿に賜わつてくださりませ。何の働きもしていないそれがしらには、何の恩賞も頂戴する権利がありませぬ」

「うむ？ 太郎にか……」

尚義は意外な顔をした。

義綱も摂津の顔を見、次いで後ろの斎義を振り返った。顎を突き出し、目は丸かつた。斎義は、その意図せぬ滑稽さが、却つて不快に感ぜられた。

大内の惣領は義綱であり、大内に下すとなれば、普通に考えれば、それは義綱へ下すことを意味する。されど「太郎に」と特に名指しで斎義へ賜わるということは、斎義が義綱の嫡男であることを鑑みれば、異例と感じられることである。

しかし今後のことを考えば、斎義にとつても摂津にとつても、斎義を義綱から独立したものと前提しておくことは都合の良いことだと、事前に申し合わせが成っていた。

それは、斎義が義綱に説明していない分野のことである。

意を酌んだ斎義が、一気に畳み掛ける。

「私は大内の嫡男でありますれば、戸惑われるのも致し方のないこと。されど今、富森城を拝領し小浜城を出ることは、大内の家を捨てて別家を立てるには当たりませぬ。私はこの拝領を終生の誇りと為し、忠孝の証しにしたいと思います。よつて殿におかれましては、今後私の働きが不足と思われましたれば、いつでもお取り上げられますよつて」

「う、うむ。そうじゃな。確かに、後々のことを思えば、助右衛門にもよきこととなるやも知れぬ。備前、其方がよければ、太郎に預けてみよつと思うがどうか」

「わっ……たくしの方には、異存はござりませぬ  
かくして富森は、義綱でも摂津でもなく、斎義に与えられた。

斎義は、城内本丸の焼け跡に簡素な居館を築くと、自分の近習を伴い、また家中諸士から新規に部屋住みの者を何名か召し抱え、志保を伴い早々に遷り住んだ。

街屋敷には、長門義員を住まわせた。

事変当時、この街屋敷には、備中の歳若い妾と所生の幼児、そして宗四郎の父母がいた。親綱に屋敷を接收された後、彼らは尚義の沙汰により退去を命ぜられたが、一族の者は皆鬨わり合いを避けて受け入れを拒否した為、行き場を失ってしまった。当座の措置として一時的に在家の者に匿われてはいたものの、それも長期に亘ることは憚られ、長門が屋敷に入る頃には再び路頭に迷う憂き目に瀕していた。

そのことを伝え聞いた長門は、備中の妾を召して母子の保護を申し入れた。しかし妾は長門主従の面前で罵倒して拒絕し、更に懐刀にて長門に向かつて粗相を働くことから、やむなく子諸共斬殺に処された。

宗四郎の父母は猶も一年、山中にて匿われていたが、斎義や長門が富森の邑民と馴染み、周辺事情の急激な変化の中で事変が忘れられてゆく過程を目の当たりにして、いよいよ行く末に絶望し、刺し違えて死んだ。

即ち、城下の邑民も始めのうちは新しい領主に対し不信を顕しており、長門が備中の妾と子供を斬つたことから、一時住処を離れる

者もいたが、長門は持ち前の気さくさからすぐに彼らと打ち解け、また同時に斎義に対する不信感も拭われていった。

親綱に対しては小浜を、そして父を頼むと改めて託した。そう確認しておこなうことが父の為でもあり、親綱の為にもなると思ったからだ。

斎義は、主家からの出戻りとなつて以来、親綱はもとより、父からも万事どこか遠慮されているように（思い過ご）こと自覚しながら（も）感じられ、斎義の側としても、こと親綱に対しては、申し訳ない気持ちがあつた。父の後継には親綱が相応しいと斎義は思つており、情深い親綱を父の側に残すことで、今後訪れる筈の難局に向けて精神的な支えになつてくれるものと期待していたのだ。

斎義の石橋家中に於ける立場は、依然義綱の後嗣ということから無役のままではあつたが、父義綱現役のまま、周囲は大河内備中の名跡を継いで実質的な家老格と見なす者が多かつた。

周囲への遠慮からか義綱だけはいい顔をしなかつたが、斎義も平然と宿老会議のような場へ出向き、父の名代としてでもなく座を占め、発言するようになつていた。

今回の事変の結果として、松丸の地位には手が付けられず、その母も塩松城にて引き続き起居していたが、かつての威勢はすっかり失せ、追従する者もいなくなつた。

ある日、斎義は塩松城へ出仕した際、ふと懐かしさから久しぶりに住吉城の方まで足を伸ばした。「元後嗣」たる斎義なれば、間の門を通過せんとて咎めもない。

相変わらず静かな城内だつたが、時折姿が見え隠れする女達からは熱い視線が送られた。

しかし静寂を期待して訪れた斎義には、それは却つて煩わしいものでしかない。

斎義は、女達には用なしの書庫に入った。

尚義から賜わつた書庫の中身は既に多くを運び出しており、寂しくなつた庫内で何気なく手に取つた書籍類の題簽を一つ一つ眺めていると、不意に庫外から声を掛けられた。

「太郎様。こちへ出でと伺い、御方様からお連れするよつ申し付けられました。もし今ご都合が宜しければ、ご同道願えますまいか」

声の主は、叔母が尚義の正室に輿入れしたときから、その側女として付いていいる老女である。斎義も尚義の後嗣として城内にいた頃には何かと世話して貰い、こと尚義妾達への手付けの際には裏で少なからぬ協力を受けており、頭の上がらぬ存在だ。

叔母は、斎義放逐に際して義綱以上に反対し、幾度となく尚義へ異見に及んだほどであり、斎義にとつてはこれもまた尽くせぬほどの恩義を受けた一人である。

老女について行つてその部屋へ顔を出すと、叔母は急かすように部屋へ招き入れ障子を閉めた。

とうに女としての盛りは過ぎていたが、それを隠すように厚く塗られた白粉が、彼女の老いを却つて強調している。決して吝嗇な女ではないが兎に角激昂しやすい性質で、よつて彼女からの情報は何であれいつも、言葉に込められた憤懣の分を差し引いて聽かねばならない。

それを判つていも、ただならぬその様子に、斎義は思わず身構えた。

「何事ですか」

叔母は、どう切り出したものか少しく口をモヤモヤさせた後、堰を切つたように喋りだした。

「お」との父は頼りにならぬ。よつておとこに頼むのじゃが、道海を討つてたも」

「何のことですか、藪から棒に。道海とは、『一門の道海殿ですか?』

「道海めは殿に面して、おとこを廻らしておつたのじゃ

道海とは石橋一門、石橋新助隆則の道号である。彼は文武に通じ、剛直で知られていた。

彼は石橋一門が悉く周囲の流れから取り残されていく中、それらの者共に担がれる形で尚義へ諫言に及んだのだらう。

だが尚義は前々から、一族一門というものを毛嫌いしていた。それは、自らの立場は血筋によるものという意識が強い為、それが通用しない者、こと有能者に対しては、劣等感に苛まれ、接するときにどうしても見下されている気がしてならなかつたからだ。

道海はその最たる対象で、一門が彼を担いだのは、その辺りの事情を踏まえると、火に油を注ぐ行為であり、逆効果でしかない。

「我が殿を山口の大内義隆や関東管領上杉憲政になぞらえ、政を俟

臣に任せ、武備を忘れ歡樂に溺れておつては、当家も終には他家の掌握となるだらう、と

齊義は穏やかな心持ちで聴いている。

叔母はその表情を見てますます苛々を募らせておる様子だつたが、齊義はその表情すら楽しんでいた。

「なるほど。その佞臣が父や私であると、御方様はお考えなのですね。して、殿は如何に応対を」

「暫くは黙つて聴いて居られたが、おもむろに『君臣をわきまえぬ妄言、不審なり』とお怒りを発せられ、勘当を申し渡し、追い出された。もはや彼の者は主家筋でも何でもない。はや討手を遣わしてたも」

「それを父上に言つたのですね。して、父上は如何なる返答を

叔母はいちいち発言者の口調を真似して見せる。その口調はもともとの発言者に對してではなく、彼女に對する不快感として齊義に伝わつた。

だが、込み上げた溜め息は飲み込み、逆に微笑みすら浮かべて、拝聴する姿勢を取り繕つていた。

「『放つておけばよい。殿のお言葉からも、我らが彼らよりも信頼を得ておることが推し測られよう』と言つておつた。されどわらわはそうとばかりは言えぬと思う。我らに好からぬ感情を持つ者は道海のみではあるまい。見せしめの意味でもこれを厳しく処さねば、我も続けるばかりに転覆を企てる者が現れようぞ」

齊義は、（その発想は彼女にしては慧眼だ）と思いながらも、どうしても氣乗りがせず、全面的に支持することはできなかつた。

「ええと、それはいつのことですか」

「五日ほどにならうか」

「ならばもう遅いでしょう。あの道海殿のことなれば、もつ奥州に

は居りますまい。御方様は斯様に仰せられますが、やはり「一門への手出しが周囲の聞こえにも障りがござります。よつてこのことば、父上の申しておるよに放つておくのが宜しからうと思われます。それでは御方様のお気持ちは晴れぬでしょうが……。一応、消息は探つてみましよう。なに、向かつ先にまるで見当が付かぬ訳ではないのです」

斎義は、連座の疑いのある者の多くを一人ずつ呼び出して聞き取り調査を行い、宥恕を引き札に情報を集めた。その目的には、情報蒐集ばかりではなく、一門衆の結束へのこ入れの意味合いが多分に含まれている。

而してほどなく、道海が出奔に当たつて高野聖を同道していたといつ情報に接し、それを叔母へ伝えると、猶も胸がすつきりしない様子だつたが、やつと諦めた。

夏になり、尚義妻石川氏は、塩松城下の屋敷地にて女の子を産んだ。もとより尚義は大変な喜びよつである。

石川摂津は、女子誕生の祝いを百目木城で行いたいと申し出た。当の幼子は塩松に置いたままではあるけれども、祝宴には尚義と共に大内父子も招かれて、盛大に行われる運びとなつた。石橋家の相馬番としての本領發揮として、取り寄せられた魚介類の豪奢なことは、塩松では例のないほどだ。

午から始まつた宴席は、様々な座興をまじえながら進められ、やがて日も暮れた。

膳が進むと、座が乱れてくる。

尚義は尚義の所へ酌をしに行つた。

「この度はおめでとうござりまする」

「うむ。早う孫の顔も見せてくれ」

尚義は笑つてお茶を濁した。勿論、尚義が自分の子供と思つてゐる今日の主役が本当は外孫かも知れぬなどとは、言える筈もない。それを知つたらこの舅はどんな反応を見せるだらう。一瞬だけそんな誘惑に駆られたが、すぐに振り払うと、尚義の盃に重ねて酒を注いだ。

「御方様も仰つておられました。庶子なれど愛しさは変わらぬと。

殿におかれましても如何ばかりのお喜びかと」

「歳からみれば、孫のよつなものだからな」

「寝顔など、格別のものでしき」

「二六時中眺めても、飽くことのないものじや」

「ならば今夜は淋しいですな」

「今宵はお」との寝顔を拝もうかの」

「されば、まだまだ呑まねばなりませぬな」

斎義は戯れ言に笑い、盛んに呑ませながらも、背の先に神経を澄ましていた。

後方では摂津が、斎義同様に順を追つて酌をしている中、義綱の所で話し込んでいる。

「備前殿、娘御はそろそろよい年頃と伺うております。我が嫡男も元服を終え、そろそろ室を迎えてやりたいと思つておるところ。甚だ不躾ではありますが、貴殿の娘御を息子弾正と添わせてはいただけますまいか」

義綱の娘、つまり斎義の妹は数人おり、下の二人がまだ親元に居た。上が十三歳。下は十歳になつたばかりである。何処かへ嫁す約束も、まだない。

摂津の嫡男は、先日元服して主君から一字拝領し、弾正尚国と名乗つていた。

条件に非の打ちようもなければ、断る理由もない。

「お話は承りました。されど娘はまだまだおぼこいもので……。また、酒の上で斯様なお話は……」

摂津は嫌なそぶりは鱗ほども見せず、爽やかに笑つた。

「これは失礼仕つた。私もかなり酔つておるようですが、後に改めて、人を介しをお願いに上がります」

そこへ斎義が、義綱の隣にある自分の座へ戻つた。

斎義は考えあぐねていた。

摂津との結びつきを強める為には、縁組を成立させるのが良いとは思うものの、長期的な見通しを思えば、思わぬところで足枷になりかねない。石川勢を敵に廻したらやつかいになるだらつことは、斎義は嫌というほど身に沁みていた。

「ああ太郎殿。いまお父上に、貴殿の妹君を当家の嫁に貰えぬもの

かとお願いしておつたところです。何卒、貴殿からもお口添えして  
くだされ。貴殿が義兄となれば、弾正も安心じや

摂津は斎義の正面きつて「呑」と言えぬ心情までも見通して、斯  
様な拳に出ているのだろう。この男は何気ないふりをしながら、そ  
の実、先の先まで読んでいるのだ。

斎義は慎重に言葉を選んだ。

「……お話は、失礼ながら脇から聴かせていただいていました。父  
にとつても大事な娘であり、私にとつても可愛い妹であります。弾  
正殿と妹が添うことについては、両家にとつて良きことと、それ以  
上を望むべくもなおお話ではあります。よつて……まあそれとは直  
接に影響のないことになるのですが、妹に弾正殿がどんな人物か語  
つて聞かせる為にも、一度腰を据えてお話をしてみたいと思います。  
……今日は如何されましたか？」

「お話はござります。今日の宴席に向けて、あれにもせまざま手伝  
わせており、今日のこの席にも末席に居をさせて貰うつもりでいたの  
ですが、一昨日からどうも風邪をひいたらしく、臥せつております。  
よつて今日ここに会つていただくことはできませぬが、近いうちに  
必ず機会をお作りしましよう。その上で改めて、この話を進めさせ  
ていただきとこうことで、宜しいでしょうかな」

「それは お大事に」

摂津はにこやかに一人へそれぞれ会釈すると、座をすらしていつ  
た。

「其方どう思う。今の話

「まあ、そう急いだ話でもないでしょ。そのときになつてから状  
況を踏まえて、こちらから条件を提示していかればいいと思います  
義綱は何の疑いも抱かず納得して、斎義に注がれた盃をすすつ  
た。義綱も尚義同様、酒が強い方ではない。ただ尚義とは違い、下

戸を称してこうこうした宴席や儀礼以外では一切酒を口にしない。曰  
頃酒を口にしないから、このよつた席にいつまでも馴染まない。

「思えば、其方と酒を酌むのは久しぶりだなあ。様子を見ていると、  
すっかり堂に入つていて、儂の出る幕なぞ、もうないようだ」  
そう言つと、嬉しいよつた淋しいよつた、はにかんだ笑顔を見せ  
た。

「何を仰りますか。まだまだ父上は必要です。私にとつても、家中  
にとつても」

裕義は父の俎に酒を注ぎ足した。

尚義は終始上機嫌で例によつて強かに酔い、一人で真つ直ぐ立つのもままならぬほどに酩酊した。それにも関わらず、夜半過ぎになると百目木に宿泊するのを拒みだし、塩松城に戻ると言って聞かなくなつた。犬可愛がりの幼子達の顔を見たくて、仕方なくなつたらしい。

「みどもが同道しますので」

斎義は摂津に申し出た。その発言に対し、別段異を申し出る向きてない。

出立際、ふと視線を感じ、見ると摂津が身動き一つせずに立つている。逆光で見えぬその視線に突き刺され、（摂津もやはり人だな）と、斎義は苦笑いを禁じ得なかつた。

百目木城から塩松城への道は、丁度口太川沿いを下る筋になる。この道沿いには川の水を導水し、また川そのものを堀代わりとして要所要所に砦が築かれ、主要道として整備されている。途中新殿村にある分岐から南へ向かうと杉沢村、その先は田村領である。隊列は尚義を中心据え、義綱が先導を執り、斎義が後に備える格好だ。

尚義は、暫くは夜風に当たつて心地良さそうにしていたが、やがて馬の揺れに不快感を増したのか、転げるよつに馬を下りると道の傍らで吐いた。

すぐに気付いた斎義は、すかさず馬を下りて駆け寄つた。

「誰か、水を汲んでこい」

斎義は、腰から提げたふすべを外して同道の小者に渡すと、尚義

の背中をさすつた。

尚義はその優しい振る舞いに感激したのか、一つずつ思い出すように細かく言葉を発している。

「其方には、済まなんだのう。出戻りと、辛い思いをする」とも、あらう。だが、其処を何とか堪えて、松丸を、宜しく支えてくれ」「勿体ないお言葉。私は大内の家に戻った時点で、石橋家の臣に立ち返つております。松丸君へ忠勤を尽くすことは、今更申すまでもない」とドドーります」

「太郎……」

義綱は馬に乗つたまま、周囲に氣を配つてゐる。しかし酔つてゐるだけに、馬さばきが常ならぬ様子で、てこずつてゐるようだ。尚義が酔つて乱れることはもう日常的になつていてはいえ、主君の醜態を世間の耳から遠ざけることは重要事である。

尚義はこれまで見せたことのないほど甲斐甲斐しさで、身体をピタリと寄せている。

義綱はその仕草に違和感を抱いたようで、頻りに首を傾げては何か言おうとしているそぶりだったが、一人の会話に割つて入る機会を逸している風でもあつた。

「其方は、酒が強いのう。顔色も変わらぬし、どこにも、乱れたところがない」

尚義は笑つて懐に手を入れた。

「実は酔い止めの薬を手に入れたので、試していったのです。先ず自分で服用してみて異常が顯れねば、安心して献上できると思つていたのですが、どうやら効き目は間違いないようです。今から呑んで悪いことこのじつとも」わつまつますまい。どうぞお試しください」

尚義は「幽まぬよつて」と言い含めおき、包み紙から取り出した大き目の丸薬を尚義の口に入れ、丁度戻つた小者からふすべを受け

取ると、中の水で飲ませた。

そして尚義を自分の馬に載せて口を取り、再び帰途に戻った。半ば置き去りにされた義綱が、そのまま列の後ろに廻る格好だ。やがて、尚義は大きないびきをかき始めた。

斎義は、父が自分の仕草に注意を凝らしているように思われ、背中に刺さる視線を煩わしく感じた。それでも、頻りに尚義の身体の傾きを直してやつていると、漸く疑心を散じたのか、また元の如く周囲へ注意を向けるようになつたようだ。

遠くの闇で梟が一声、ギヤーッと鳴いた。

一行は皆驚いて、その声の方向へ一瞬顔を向けたが、尚義だけは眠つたままだつた。

塩松城に着くと、斎義は尚義を寝所までおぶつていつた。

宿居に布団を敷かせ、寝かせると、尚義はかすかに目を開けて礼を言つた、ようだ。

斎義と義綱はそのまますぐに城を辞し、それぞれ自分の居城へと帰途に着いた。

義綱は亮かに眠そうな目をして、表情も動きも全体的に緩慢としている。

父と小浜城下で別れると、漸く斎義は深呼吸して首を廻し、夜空を見上げた。

もう一刻もすれば、山の端が白みだすだらう。夜露の湿氣が草と土の香りを運んで、密かに高まつっていた斎義の動悸を幾分落ち着けた。（後は、なるようになるだけだと）。

斎義は富森城へ戻ると、汗ばんだ小袖を換えて再び同じ大紋を着込んだ。そして周囲の者を下げると、屋敷前庭に出た。

この城に遷つたときはまだ仮屋敷だったが、徐々に建物を普請してゆき、様相は一日一日様変わりしている。この本館の邸宅はもう殆ど完成していて、生活する分には何の支障もない。

広い庭は一角だけ来客向けとして常にきちんと整備されており、それ以外はわざと鬱蒼とさせている。境界には灌木を植え込み、その茂みの先は伸ばしたままの竹林になっている。

斎義は茂みに声を掛けた。

「いるか」

「……ここに」

茂みの中から、小さな声で男が返事をした。姿は見せない。

「ぬかりはござりませぬか」

「つむ、恐ろしいほどにな……。一つ危惧するのは、公が逝かず、

この企てが露見した場合だが」

「その点の心配は無用に願います。効き目に間違いござりませぬ。ただ、末期に若君へ疑いの目を向け、その気持ちを他人へ漏らされた場合のみ、揉み消しに手間が掛かりことになります。よつて、できるだけ早くお側へ着き、少しでも疑いの芽を摘み取ることが重要になります」

「じきに連絡が来よ。……弾正の嫁に我が妹をといつ話、進めよ」とと思つただが

「……」

「縁組の条件に、其方の身柄を申し請けることが加えられるのなら、其方はどうする?」

「それがしは主人の命に従うのみです。百目木の大殿からその旨を仰せつかつたならば、そのときより主人は太郎様になります。されど思いますに、これはさほど急いだ話ではありますまい。今は田の前のことに集中なされませ」

「うむ。其方の言つ通りだ」

声の主は、百目木の門番小平である。斎義に信頼を寄せるようになつた石川標津は、斎義から諒解を取つた上で小平を富森常駐と為し、双方の連絡手段としていた。

近付いてくる足音に反応して、小平が再び気配を消した。斎義が目を向けると、駆け足で宿居がやつてきた。

「塩松より危急の使者が」

「通せ」

使者の旨は予定通りのものだ。

斎義はその報告を聴くと、すぐさま馬に飛び乗つて駆け出した。山の端が（氣のせいか）と疑つほどほんの少しだけ白み掛けていふ。身体は少し重く感ぜられたが、意識の方は朝風の刺激に覚醒し、一層研ぎ澄まされていくような氣すらしていた。

塩松城内は、ほんの一刻足らず前に辞去したときと変わらずに、静かだつた。斎義は呼吸を調節して、少しでも気分を高揚させてから、寝所に入った。

尚義の枕辺では典医が脈を取り、その後方では正室たる叔母が、瞑目したまま眉尻を下げる端座している。他に誰もまだ到着していない。

斎義は典医の対面に座り、尚義の顔を見つめた。

尚義は眉間に小さく皺を寄せ、少し口を開けて小刻みに浅い呼吸をしている。顔は土氣色で、口元には微かに喀血の跡が拭いきれずになつていて。

「何者かに附子の類を盛られた模様。……予断を許さぬ状況です」

斎義は懸命に困惑の表情を取り繕つた。

「吐いたか」

「吐かれたのは血だけです。呑み食いされたものを吐き出されれば、多少は見込みも出てくるのですが……。診療の始めに吐瀉を試みましたが駄目でした。咳き込むばかりになつたので、致し方なく止瀉を投薬しました」

斎義は心象に反する険しい顔を作つた。

「何かお心当たりなど、『じぞりませぬか』

「……思い当たる節と言えど、五百木の宴席しかない。おのれ  
摂津め、謀つたな」

斎義は声を震わせ、尚義の手を強く握つた。我ながら演技が拙い  
と感じたが、目を瞬かせて漸く一條涙を搾り出し、込み上げる感情  
を抑えているふりをすることに腐心した。

「太郎殿は真つ先に登城して、流石我が殿の身を誰より案じ、忠孝  
の筋を立てておられる。何卒、五百木に手を入れてたも」

叔母の今にも崩れ落ちそうなほどに高揚した様子を見て、斎義は  
幾分安心感を得た。

そこへ義綱が息を切らして到着した。義綱は斎義の存在に少しく  
驚いた表情をした。

叔母がすぐ口を開いてくれるかと思いきや、眞の前で取り乱すの  
を我慢しているのだろう、口を震わせたまま声を発しない。

義綱はその雰囲気に（どうしたものか）とたじろいでいる。

斎義にしてみれば、「一難去つてまた一難」である。すかさず自  
ら機先を制した。

「父上つ、あな口惜しや。殿は附子を盛られた由。疑わしきは石川  
摂津。早急に呼び出して詰問せられよ。素直に応じぬときには、討

ち果たすべきです」

義綱はその涙を流しながらの訴えに面食らつた様子で、到着第一声として息子へ慰めの言葉を発した。

「太郎落ち着け。其方の言いたいことは解つた。追々皆集まつてくるだろう。そのときの摂津の様子を見れば、事態は瞭然とならうぞ」その言葉を聞いて、斎義は漸く事態の方向付けに手応えを得た。

その時、尚義が目を閉じたまま口を動かした。すかさず典医が口に耳を寄せる。目を閉じて聴き取ると、義綱を差し招いた。

「大内様、お傍へ」

義綱は枕元まで膝を進め、腰を折つて耳を寄せた。

斎義は枕元を父に譲りながらも、そのすぐ隣を占めて顔を寄せた。斎義は動悸が高まり、もし何かまずいことを尚義が口走つたりビツつ場を取り繕つたものか、瞬時にあれこれ考えを巡らしている。

尚義の声はかすれ、吐く息は餒えた臭いがした。

「備前……太郎……其方らが頼みじや。お松を、松丸を……」

その後は咳き込んで言葉にならなかつた。  
朝になつて、尚義は息を引き取つた。

その後、漸くのように続々と家中諸士が参集してきた。

それらの視線を集めて、斉義は嗚咽、激昂し、単身でも百日木に撃ち入らんとする勢いで、みつともないほどに泣き喚いて見せた。その、普段決して見せることのない彼の乱れる姿に、誰もが心を傷めた。

だが義綱だけは、それをたしなめるでもなく、距離を置き冷めた眼をして息子の姿を眺めている。

斉義は、父が自分の様子のおかしいことに気付いたのだと感じ、詳しく問い合わせるのを避ける為にも一層激しく哭いて、取り付く島を与えなかつた。

頃よしと廁へ立つと、折りよく小平から摂津が百日木を出たとの報。そのまま住吉城へ避難することにした。

そして人気のない部屋に入ると、襖を閉めてそのまま横になり、暫し三どろんだ。

暁時を過ぎて塩松城へ戻ると、摂津は既に帰つた後である。姿を見せた斉義に対し周囲からは、摂津の来訪及びその様子、周囲の冷たい視線の為に居づらくなつて帰つたのだろうといつ憶測まで、訊きもしないのに繰り返し事細かに語られた。

それらの視線は、斉義の反応の機微を捉えでは、（疑うべきは寧ろ……）と語つてゐるよつにも窺われる。

それは杞憂と念じながらも、話の内容がつまらなかつとくだからなかろうと、斉義は再び頻りに激昂して見せた。念の入つたその行為は奏功し、内心ではそれまで一概に摂津を疑つのはどうかと考えていた者までもが、斉義に同調していった。

その風潮が一人立ちしたと判断するや、斎義はケロリと態度を一変させて怜俐な面を遠慮なく出すようになり、確實に同調した者を集め、その晩から謀議を催した。

それは次第に規模を大きくしてゆき、一七日の頃には義綱を始めとする家老衆や、斎義の台頭にいい顔をしていなかつた筈の一門衆までも取り込んで、殆どが参加するよつになつてゆく。

その中で義綱は、筆頭家老といつこともあつて謀議の中心となるに相応しい存在ではあつたが、積極的に参加しているようには窺えず、どこか距離を置き、場に一応顔を出しているだけといった風である。

斎義はその様子に、父は腹の中にまだ釈然としないものを抱えているなど感じ、ぼろを出さぬ為にも余り彼の様子には触れずにおいた。

斎義は尚義の弔い合戦と称し、早い時期に石川討伐の軍を催すことを提案した。

石川家は既述のように、大身であるが家格は高くない。譜代の者で固められた家老衆の中に、彼を弁護する者はいなかつた。また摂津の方も、以降出仕していない。田村に後援を頼んでいるとの情報が、噂として流布していた。

謀議は、石川摂津が田村と完全に癒着する前に切り取れるだけ切り取りたいという思惑もあり、七七日の喪が明けたときを出陣の日と定め、一斉に百日木を目指すことになつた。一応、松丸を総大将に仰ぎながら、陣代には順当に義綱が推された。

義綱は「お聴きいただきたい」と前置きして、話し始めた。

「それがしは亡き尚義公の家老として、主君の横死を誰よりも無念

に思います。一時は殉死も考えました」

周囲にどよめきが起きた。斎義は誰よりも速く、強く反応した。

「父上。お気持ちは痛いほど解りますが、どうか早まりないでください。遺される者の身にもなって、自重くださるよつ、お願ひ致します」

「そうです。一同、太郎殿と気持ちは同じですぞ」

その言葉に、義綱は周囲を見廻して大きく一礼した。

「それがしもご先代静阿公逝去の折、父義生に殉死され、苦労した覚えがあります。我が子可愛さと思われるかも知れませぬが、嘲笑われるのを覚悟で、もう少し生き長らえたいと思います。先ずはそれについて、お許しをいただきたい。ついてはこれを一つの区切りと考え、今回の陣を一期として、嫡男太郎左衛門に家督を譲りたいと思います。そして余生を次世代の為に、そして尚義公の菩提を弔つて生きたいと思う所存であります」

誰からとなく、歓声が沸いた。

斎義は、父が自分の意に適つた言動を執つたことに満足し、彼を称える周囲の者に対し、繰り返しあ辞儀をして応えた。

七七日の喪が明けたその日、百日木へ攻め入る軍勢は総て新殿皆に集結し、出陣の号令を今や遅しと待っている。

本陣にて出陣の儀が執り行われると、馬に乗り込んだ斎義の傍らに、義綱が寄つて来た。

先陣は斎義が請け持つていた。自ら志願し、誰もがそれに同意したからだ。

「父上、行きます」

挨拶した斎義に対し、義綱は浮かない顔をして、恐らくずっと腹の中に溜めてきたのであらう質問を、意を決したようになびせ掛けた。

「其方あのとき、高森攻めに先立つて、百日木で何を話してきた。まだ何か、隠していることがあるのではないか」

斎義は苦笑いを浮かべた。

「……流石父上。隠しあおせませぬな」

「茶化すでない。腹の中のものを全部出してゆけ」

「……父上には申し訳なく思いますが、この戦さ、負けますぞ。お互いどれだけ被害を抑えたまま決定的な局面を作り出すかが、この陣の課題ですな」

「どういうことだ。……お互い?」

斎義は微笑を浮かべたまま、父を見下ろしている。

義綱は諦めたように話題を変えた。

「……それからもう一つ。百日木の宴席の帰り、酔い止めの薬を呑ませたな」

「……ええ」

「あの薬は、何だつたんだ?」

斎義はひとしきり馬のたてがみを撫でた後、呟くように言った。

「……公は私に、『先代の思い出を繰り返し話してくださいました。天文の騒乱の折、諸家内紛が起こらなかつたのは、ご先代の塩松のみであつたと。公の、家中の者の心中を把握しようという志は、誰にもありますまい。周囲からは暗愚と陰口を叩かれながらも、あの方はあの方なりにお家のことを考えておられたのです』

「何を言つておる。質問に答えよ」

「……尚義公は、酒をお嫌いな方でした。酒を呑むと、周囲の者の心底が見えてくるのでしょうか。つまりそれが、あの方にとつては現世

斎義は空を見上げた。一面薄い雲に覆われてゐる。

「素面でいるとき、公の目にほほ、人々の姿は幾重もの虚実をまとつた、この世のものとも思えぬ妖怪変化に映つてゐたのです。だからあの方は毎日、苦しみながらも酒を流し込み、真理を見極めようとなさつておられた。……あの方にとつては、素面の状態こそが、世人が言つところの酔つ払つた状態だつたとは言えますまいか

斎義は父の目を見つめた。義綱は避けるように目を伏せた。

「だから私は、酔止めの薬を差し上げたのです。とめどなく訪れる、酔いの苦しみから解き放たれるように」

「やはりお前が……」

はつと手を上げた義綱に対し、斎義は一瞬だけ満面の笑顔を見せると、馬に鞭を当てた。そして、尚義を載せて馬の口を取つた道を、あの夜とは逆に向かつて駆けていった。

斎義が軍勢を率いて出撃すると、申し合わせたように百日木城から石川摂津の軍勢が、迎え撃つべく出てきた。塩松勢がそれを正面

から突き崩して一気に蹴散らすと、百田木勢は捨て首数級ばかりを献じて撤収し、城門全てを堅く閉ざした。

百田木勢が撤収を開始すると、斎義はわざと追撃に勢いを減じた。塩松勢は百田木の街場を占拠するも、既に街屋敷は総てもぬけの殻である。

「長期戦ともなれば、田村のこともあり、何かと分が悪い」

斎義は独断で撤退を決定し、諸将に伝達した。長滞陣しては、街場に火を点ける族が現れるだろう、という懸念もある。

続々出陣してくる本隊は、到着するかしないうちに戻る運びとなり、状況が掴めず諸将混乱している。それを尻目に、斎義は手勢を率いて新殿砦へ戻つていった。

塩松勢が撤退を始めると、百田木勢は門を開けて追撃に飛び出してきた。

斎義から取り残された形の塩松勢は大混乱となり、総崩れとなって新殿砦へ逃げ込んだ。この追撃にも執拗さは微塵もなく、従つて幸いにも兜首は揚げられなかつたが、捨て首十級余りが犠牲となつた。

そのまま摂津は杉沢に陣を張り、三春へ使者を送つた。出陣要請の類でもあろうか。

斎義は帰陣すると、すぐさま父へ面会を申し入れた。義綱は結局、砦を出ることすらないままだ。

義綱は不機嫌な顔で迎えた。

先ほど斎義が話した事々を受け、摂津が濡れ衣だったことは父にも判然としただろう。しかし、それを今更諸将へ打ち明ける訳にはいかないし、既に開戦してしまつた百田木討伐を覆すこともできまい。

また、現況を招くまでの過程に於いて、摂津の方にも幾つか不自

然なふしがあることにも、気付いているに違いない。

父が混乱しているだらうことは、斎義には充分に想像がつく。自分のことを見ているのでもありう、とも。

「其方、何を考えて一人戻りおつたか！」

義綱は珍しく大声を上げた。自ら先陣を名乗り出ておきながら、戦陣をほつたらかして戻つたとあっては、本人はもとよりその父にとつても責任問題である。

だからこの叱責は当然のことであり、斎義もある程度覚悟はしていたものの、やはり気分の好いものではなかつた。

とはいゝ、斎義は出陣前に言い置いた筈だ、「この戦さ、負けますぞ」と。自分の行動を一向に理解しない父に対して、彼はいらつきすら感じている。

だから、幾分怒氣を含めた口調で発言した。

「田村が塩松へ出兵する、といつ風聞がある昨今、如何にしてお家を保つか、という岐路に我らは立っています」

義綱は「其方……」と少し語調を濁らせた後、一拍置いて問い合わせた。

「確認しておきたい。今言つたお家とは、どの家のことだ。石橋か、大内か」

「……塩松です。我々は塩松殿の名跡を守る為に存在しています」「尚義公の後嗣は松丸君である。其方は松丸君を奉り、守り立てる」と「そが命題であると存じておるのだな」

「勿論です。その上で、岐路に立つていて申しているのです」

「……して、如何にすべきと申すか」

「早急に三春へ使者を遣わすことです。松丸君に三春へお通りいただくことも、視野に入れて貰いたい。今ならば家中に反対の者は少なかろううと思います。加えて、田村麾下になつたとて、今ならば塩松の権益が侵されることもまずあり得ませぬ」

義綱は表情を固めたまま、肩を怒らせ、息を止めた。

怒号が飛ぶかと斎義は首を竦めたが、義綱は静かに返答した。

「……わかつた。早速、合議に掛けよつ。三春への使者には、其方が発つのだろ」

義綱は最後に斎義をひと睨みすると、座を立つた。

田村清顕からの使者が杉沢の陣を訪れ、摂津が田村を後ろ盾として手を結んだ、といつことは、既にかなり信憑性の高い情報として入つていた。

即ち今後、摂津と敵対することは、田村と敵対することになる。田村の麾下に入るといつことは、摂津と和睦することになる。

義綱の「田村に降伏」という提唱に、集まつた諸将は一瞬どよめいたが、状況を思えば無理からぬことと、斎義の予期通り、すんなりと受け入れる者が多かつた。石川摂津に対してすら簡単に負け戦をするようでは、威勢盛んな田村になど勝てよう筈もないという

ことである。反対意見は、やはり一門中から多く出た。されど一門でも意見は分かれ、岩角玄蕃などの有力者が義綱の援護に入り、最後まで反対していた大場内美濃と寺坂三河が途中激昂して席を立つたことから、議題の重大さの割に会議は短時間で決した。

その夜、大場内と寺坂は密かに松丸を連れ出し、領外へ脱出した。

翌日、斎義は三春へ赴いた。

「儂が田村大膳じや」

「大内太郎左衛門でござります」

田村大膳大夫清顯は身体が大きく、伸ばした髭鬚ともあいまつて、如何にも武辺一辺倒という印象の容貌であった。年齢はもう壮年に差し掛かっていたが、子供は数年前に産まれた娘が一人いるきりと聞いている。この分では、いざれ婿を迎えることになるのだろう。

「父備前義綱は此度の一件の責を一身に引き受け、隠居の意を申し出ております。松丸君は大場内美濃らに伴われ、相馬へ逃れたとの由。もはや塩松は田村殿の検断にお任せ致しますれば、これまでの経緯はどうか水に流されるよう、お願い申し入れます」

「塩松殿の後嗣、松丸殿が逐電となつた今、塩松の主は御辺である。松丸殿の産まれるまで、御辺は尚義公の後継者だつたのだからな。塩松殿たる御辺が田村の麾下に就く、そう捉えて把握して宜しかろうな」

「どうも清顯は、名家たる塩松を武力で以つて制圧したのではなく、自らの威徳に屈したのだとしていたようだつた。

斎義は、そのようなことはどうでもいいと思つてゐる。今はただ、

清顯の機嫌を損なわぬようと思つばかりで、ただただ平伏していった。何より先ずは、所領の安堵が最善の策である。

清顯は満足そうな顔で鬚を揺らし、大仰に笑つた。

「田村の麾下に就くに当たつて、其方に『顯』の一字を『え』よう。備前顯綱と名乗るがよい。当面は塩松家中の内、石川摂津を除いては、其方の麾下と為してその下知に任せよう。石川には現在の所領に、塩松の蔵入から一・三の地を増してやり、其方と同格の扱いとする。詳しくは追つて沙汰致す。異存はあるか」

「仰せのままに」

かくして斎義は顯綱と名を改めて大内家当主となり、塩松三十三郷の内、石川領として新殿砦より東方の七郷を除いた地域の裁量を任せられた。

松丸が逐電した以上、顯綱を尚義の後継と見なすことに異を唱える者も既になく、石橋家中だった者は一門や家老といえども、顯綱の麾下ということになった。

顯綱は基本的に富森城に居り、用向きのあるときだけ三春へ赴くという姿勢を許された。当面は誓紙を提出するのみで人質を差し出す必要も求められず、思惑通りの冊封体制に組み込まれた訳である。

その一方で顯綱は妹を石川弾正に配し、形の上でもこれと和睦した。だがこれは、既決事項の履行に過ぎない。この山場を越えおおせてしまつた以上、もう誼みを強める益もないのだから。

以降両者は田村麾下の新参者として同列に立つたことから、周囲からはことあるごとに比較の対象とされるようになる。更には、清顯から可愛がられた弾正が、何かと大身の顯綱に対抗意識を燃やすようになりだすと、やがて両家中総じて訳もなく牽制しあつようになつた。

その為、交流も疎遠になつてゆくことになる。

顯綱は三春から帰つて、大方狙い通りに事が運んだことに満足していたが、正室志保姫に対してのみ、心を傷めていた。

志保にしてみれば、夫は晴れて塩松殿となつたものの、父は横死し、異母弟は逐電して、実家は他家の掌握となつてしまつた訳である。

顯綱は顔を合わせづらかつたが、やはりきちんと話しておくべき

と思い、諸士を塩松城に集めて新体制を布告した後、会いに行つた。

顯綱は尚義の養子としてその側近くにいた頃から、この主筋の妻に遠慮することなどなかつたから、いま主家たる石橋家がなくなつたとて、彼の妻に対する態度に変わりはなかつた。

ただ、既に彼女の存在は「是も非もなく在るもの」ではなくつていた。

志保の方でも夫に対する信頼は揺るぎないものとなつており、此度彼がしでかした行為を咎めるでもなかつたが、それでもやはり一連の不幸には心を傷め、ときに塞ぎ込む口もあつた。

顯綱が部屋へ入ると、志保は柔らかく皿を細め、小さく口唇を上げた。それは新婚当初から、どんなときでも彼を迎えるときに見せている表情だつた。

顯綱は、自分はこの表情に甘えているのかも知れぬと感じた。

「元気そうだ」

「お帰りなされませ。今日は気分が好う」さります

「父が隠居し、儂が新たな惣領となつた。そして、田村殿から一字拝領を賜わつた」

「何と付けられましたか」

「備前……顕綱だ」

「左様、ですか。」

「おめでとうございます」

志保は柔らかな表情のまま、頭を伏せた。

斎義の名は尚義が付けたものだ。そして顕は田村の通字、綱の字と備前は実父義綱を継承するものである。志保は夫から実家の痕跡が消えてゆくのが淋しかったのだろう。顕綱はその気持ちがよく掴めていた。

「なに、すぐに慣れる。それに、死ぬまでこの名でいるつもりもない」

慰めになるとも思えなかつたが、他に言葉が浮かばなかつた。

勿論、言葉の通り、いつまでも田村の下風にあるつもりはなかつたし、時の変遷如何によつては、逆に自分が田村を呑み込む機会もあると思つていた。

志保は表情を崩さぬまま、ただ小さく「はい」と答えた。

顕綱は婚礼当初からこの正室の所へ頻繁に通うということはなかつたが、それは多分に彼女の身体を気遣つてのものだつた。上から下まで痩せぎすの身体に、肌は白いながらも艶やかさは感じられない。顔の造作も端整とは言えず、その身体にかきたてられるものが少ないという理由もまるでない訳ではないが、毎晩通つては彼女に無理を強いているようすで、それが足を遠ざける大きな理由となつていた。

そんな彼女に遠慮している訳でもないのだが、これまで他の女に手を付けることがあつても、熱を上げて入れ込むといつことは一切なかつた。

「どうか側室でも置かれなされませ」

こつも志保はそう言つものの、顕綱は別段子供が欲しいと感じて

いなかつた。いま子供ができたとて、どこぞへ人質に出さざるを得なくなるのは目に見えている。情に流されて身動きが取れなくなるのを避けたかったのだ。

「なに、子はまだいらぬ。戦乱の世が終わり、平和な時が来たら、幾らでも作ればよい」

「その頃には私はもう……」

「何を言う。それを言うなら儂とて明日をも知れぬ身だ。だが今それを言つても詮なきこと。其方も氣弱なことは申すでない」

この場ではそう言つたものの、顯綱は暫くして幾人か妾を囲つた。しがらみを避ける為、いずれも身分の低い女だった。一年経ち一年経ち、顯綱は三男一女を儲けた（うち一女は早世）。

志保はしばしばどこか儂げな表情をして薄幸を匂わせていたが、その分、微笑んだときに顯綱は救われたような気になつた。だから志保が「子供が欲しい」と言えば、どこぞより知らぬ子供を拐しても連れてゆきたいとさえ思つ。だが彼女の望んでいるのが塩松殿の後継者である以上、誰でも良いという訳ではなく、少なくとも顯綱が父親である必要があつたのだ。

子を産んだ妾達は出産後幾許もなく、顯綱からなにかの金子を渡されて放逐となつた。

やがて案の定、三春から人質を差し出すよう強要されて、長男三右衛門は田村清顯の側で育てられることとなつた。そして次男以下も塩松城にて尚義後室の許に置かせられた。

結局夫婦の手許には一人も残らなかつたが、「子息がいる」という事実だけで志保は安堵したのか、明るい表情をすることが多くなつたと顯綱は感じていた。

それでも志保は、以降も寝たり起きたりの状態から快復することなく、仮令子供を手許に置いたとて、満足に育てることなどでき

なかつただろ「。

ともあれ顕綱は彼女の薄幸が重なるほどに、いたわらひつといふ気持ちが強まつていつた。

妾をすぐに放逐したのも、總て志保への配慮だつた。彼女が格気を起こす筈はなかつたが、そうしなければ顕綱の気が済まなかつたのだ。

だが夫婦仲が睦まじくなるのと反比例するよつて、子供達はその育てられた環境の故か、一向に顕綱や志保に懐かなかつた。

中でも尚義後室の願いを叶える形で石橋姓となつて三右衛門は、周囲から塩松殿の後継者と見なされ、清顕の膝元で育てられただけに、実父たる顕綱に対してもどこか尊大に振る舞うことが多くなつていつた。

塩松・住吉両城は構えこそ維持されたものの、維持に手間のかかる屋敷類は徐々に廃棄され、一皆としての位置付けと化していつた。これらの処置は、あくまで石橋家の家名維持が目的である。既に政治的な権限は何も残されておらず、家の再興など絵空事だということは、誰もが知つていた。そこに、「松丸逐電は放伐ではないか」という、外聞の悪印象を拭う効果が期待されていることも。

それでも、顕綱の一連の行動が決して自己利益ばかりを求めたものではないという認識が浸透していたことから、總じて家中は顕綱を中心にして一つにまとまる結果となつたのだった。

即ち以降、顕綱は田村麾下の末席にて忍辱の日を送ることとなる。幾度となく出陣し、魁軍殿軍と無双の働きを為しながらも、田村家中での扱いが重くなるということは一切なかつた。それでも顕綱は、清顯の下知に只管従い続けた。

小身の者や時として身分の低い者からまで、降将と見下されなが

らも、それに耐え続けられたのは、志保の微笑みが糧としてあつたからであり、勿論全ては先行きに期するものがあるからこそであつた。

数年が経過し、元号は天正に変わっている。

「三春より、」使者です」

小姓の報告に、顯綱は頷いた。

大方、出陣の命令か使者に立てとことだらう。いずれにせよ、また何か面倒を押し付けようという魂胆なのは、田に見えている。

顯綱は既に、大抵のことでは狼狽せぬほど様々に場数を踏んでおり、どんな無理難題を押し付けられようと、もはや清顯の思考程度の嫌がらせでは、対処に困るような場面に出くわすことも殆どない。それに、他領にて使命を果たせば果たすほどに内外にて名声が高まつたことから、それら権柄尽くの無理強いも、結果として顯綱にとつてはあながち無駄ではなかつた。

しかし、やはり煩わしいことには変わりがない。

田村の人間は、総じて外交下手だった。

今は威勢が盛んであればこそ、何もせすとも周囲から擦り寄つて来るのである。そこに胡坐をかいていては、やがて時世から取り残されるのは眼に見えている。

しかしそのことに気付いている者は、どうやら三春にはいないようであった。

対面すると、使者はいつものように尊大なそぶりでおもむりに口を開いた。

「一本松と大森の諍いは聞いておるつな」

「はあ……」

「此度、三春の殿がその調停に立たれることとなり、貴殿にその取

り扱いを命ぜられた

使者は清顕の書簡を差し出した。

顕綱はそれを押しいただき、目を通した。

信夫郡大森城の伊達兵部大輔実元は晴宗の弟で、幼名時宗丸、天文の乱の導火線になつた男である。かの戦乱にて父植宗に従つた彼は、乱の終結後も越後上杉家に入嗣することなく、晴宗の支配から半ば独立した存在として、信夫郡の大半を領してきた。

しかし永禄末年頃から、それまで同じく元植宗党として良好な関係を持続させてきた一本松の畠山修理大夫義国との関係が、急激に悪化する。その結果、義国が信夫郡南端のハ丁目城を陥落させ、更に北上を窺う姿勢を見せた。

窮地に陥つた実元は、信夫郡杉目城の晴宗へ助けを求める。

晴宗は米沢の輝宗に執り成し、その結果実元は、晴宗の娘を正室に迎えることで、実質的にその麾下の列に復した。

輝宗の後援を取り付けた実元は、義国に対して反撃に転じハ丁目城を取り返すと、更に一本松城を窺う姿勢を見せた。

こうなると義国に勝ち目はない。

今度は義国が、窮地を脱するべく周辺諸氏に調停を求め始める。

天正二年（1574）のことである。

先ず会津の葦名盛興を頼つた。

盛興の母は輝宗の伯母、盛興の正室は輝宗の娘（実は妹）である。

しかし、盛興は少し前から病臥となつており、盛興の父盛氏が大御所として健在とはいえ、とても他領のことなどに構つていられる状況ではなかつた。

義国が次に頼つたのが田村清顕だった。清顕の母は輝宗の叔母で

ある。

清顕はこれを、一本松を傘下に取り込む機会として、顕綱に全権を委ねた。

この役目が家中で最も相応しいのは立地的に彼を擋いてなかつたし、能力的にも申し分がなかつた。そして更には、もしも失敗した場合には、彼に責任を負わせることもできる訳だ。

また、ほどなく葦名盛興が而立にも至らず死んだと公表されたことから、田村と会津との間に位置する安積郡周辺でも、緊張した雰囲気が満ちて予断を許さぬ状況となつていた。

その為、清顕としても、葦名への対応で何事が起こつたときにすぐ反応できるよう態勢を調べておく必要があり、一本松にかかりきりになつてゐる余裕がなかつたのだ。

顯綱はすぐさま一本松と連絡を取り、義国を宮森へ招いた。二人はこれまで何度も何度か面会している。顯綱は義国の嫡男義綱との方が歳が近かつたが、そちらとの面識はまだない。

島山義国は、天文の乱で活躍した家泰・義氏兄弟の従弟である。戦陣で相次いで夭折した従兄の跡を若年にして受けて以来二十五年余、斜陽の名門を何とか保つてきたものの、ここに来て存亡の危機を迎えていた。

義国は顔中に皺を寄せて、神経病みか体調が悪いのか、病的に疲れた顔をしている。

「どうやら苦労なさっている様子」

「執り成してくれるのは、もう大内殿を擱いてありません」

顯綱は、義国の言葉をわざと意地悪く取り、反応を見た。

「……私なんぞの対処では、心許なく思われるでしょうが、できる限りのことは致しましょう。それに、塩松とて状況は大して変わりませぬ。今後はお互い存分に協力体制で以つて、事に当たつて参りたいのですな」

義国は慌てて取り繕つた。

「どうか気を悪くしないでください。貴殿を塩松殿と見込んで、たつてお願いしているのでござる」

この男は、これでおもねつているつもりらしい。

「解っています。一本松と塩松の結びつきを深める為にも、ご嫡男に私の妹を添わせて貰えますまい」

義綱の末娘も十五歳になっていた。

往古ならいざ知らず、今の島山家と縁を結んだとて何の後ろ盾に

もならないが、それでも大内の家にとつては、充分に箔を付ける効果が期待された。

義国には断ることはできない。顯綱との仲が反故になつては、完全に八方塞となつてしまつからだ。嘘でも喜ばねばならない局面だといふことくらいは、流石に分かつたらしい。

一瞬逡巡した後、顔を歪めた。

「それは願つてもない」

顯綱は義国の引きついた笑い顔を見て、自分も笑つた。名門も堕ちたものだ、と。

顯綱はその後、杉田まで行つた。

当地で晴宗は伊達家にとつて仙道地方の窓口となつており、義綱はもとより、顯綱も懇意となつて幾度も面会を果たしていた。

晴宗の顔からはかつての険しさは消え失せ、微笑みは柔らかくなつていた。幼い頃に一度対面した稙宗にそつくりな印象だ。ここ数年で急に歳を取つたように感じられる。弟の実元が完全に家中へ戻つたことに、安心しているのでもある。自分が引き起こした家中分裂を、元の鞘に収める形で收拾をつけたのだから、さもありなん。

晴宗は「米沢へ直接訴えた方が、話が早かる」と提案した。

そこで顯綱は、その足で米沢を訪れ、輝宗と面会する運びとなつた。伊達氏との交渉事はこれまで何度もしてきたが、大抵杉田で用が足りており、輝宗に会つのは、実はこれが初めてである。

つまり顯綱は、米沢の城下町を田にするのも、これが初めてだつた。

塩松や一本松、或いは杉田や二春にだつて、城下に街場は形成されている。とは云えそれらはあくまで家中の屋敷地の集まりでしか

ない。

対して米沢の城下には、職人や商人といった侍ではない身分の者が多く集住している。

これは塩松では不可能だ。顯綱はそう思った。伊達家の経済基盤は優に塩松を十倍する。さればこそ、この街場の住民にたづきを与えるのだ。

この街場に対して顯綱は、羨望の気持ちもないではないが、ここはあくまで別の天地との感情が支配的ではあった。恐らく物見遊山と同類のものである。

街場の中心たる米沢城とて、さほど堅牢という感じでもない。それでもこの活況を呼んでいるのは、やはりここが他領から隔絶した地勢だからだろうというのが、顯綱が初見で導いた見立てである。杉田から板谷の山並みを越えて、漸く伊達家の中心地に辿り着くのだと考えれば、山向こうからはるばると攻め寄せようなど思いもよらないことだ。本貫たる伊達郡を離れ当地へ本拠地を遷した、晴宗の慧眼を称える他はない。

「大内備前殿だな。其方がことは幼い頃より、父から繰り返し聞かされておつた」

「お初にお目にかかります」

輝宗は背が高くはないが、父親の若い頃同様、眼差しには厳しさがあり、顕綱と大して歳が変わらぬ筈であるが、大層な風格を備えている。

顕綱は少々緊張しながらも、弁舌を振るつた。

「畠山に異心なきことは、私が保証します。修理殿が仲違いしたのは、伊達麾下としての兵部殿ではあります。先だって兵部殿が正式に米沢殿の麾下に入つた以上、金輪際衝突することはござりませぬ。此度、伊達殿の下知によつて兵部殿が八丁目城を攻落したことば、逆に伊達殿にとつては余り外聞の良きことと思えませぬ」

輝宗は意外なことを言つと思つたのか、目を丸くした。この表情は晴宗とはまるで違う。恐らく美人の誉れの高かつた母親（磐城重隆の娘）の血だろうか。

ともあれ顕綱は、その表情の変化を見て、口が滑つたことに気付いた。

「……それは田村殿の」

「申し訳ござりませぬ。独断の見解です」

顕綱は手を付きながらも、この局面を切り抜ける口上を幾つも頭の中に準備した。

輝宗は田を怒らせながらも、口を笑わせた。

「……此度の戦さは兵部の私闘だ。其方の口上では八丁目も畠山に

返さねばならぬようだが、彼の地はそもそも伊達の領分。これは返さぬが、其方に免じて一本松はそのまま安堵してやる」  
輝宗は腰を上げた。そして去り際に立ち止まると、唾然とする顕綱を悪戯な目で見やつた。

「 其方にとって、田村の居心地は悪からつ。まあ、だからといって、儂の許へ来ても大差はなからうがな。客としてなら歓迎しう。いつも遊びに来るがいい」

そう言つと、輝宗は笑いながら退出した。

顕綱は輝宗に対し、敬愛の情を覚えた。

威儀を保ちながらもどこか飄々としており、発する言葉も、過ぎるほどに大胆かと思えば、心の機微に突っ込んでくる細やかさをも持ち合わせている。自分のことを全てお見通しなのではないかと、氣味悪さすら抱くほどだった。

亮かに、猛々しいばかりの清顕とは違う。遠い関係にいれば親しみを感じるのが、近くにて利害関係を結んだら危険かも知れないと感じた。

顕綱は、輝宗の使者に伴われて大森城へ赴き、実元に交渉の結果を伝えた。続いて一本松へ戻り義国に次第を説明、そしてその後、義国を伴つて三春まで出向き、揃つて清顕に報告する運びとなつた。

「 備前、大儀であった。一本松殿、これでひと先ず安心でござりやうかな」

「 何とお礼を申し上げてよいやら」

清顕は上座でふんぞり返つてゐる。

義国は相変わらず疲れた顔で微笑み、顕綱を向いて改めて深くお辞儀した。

「 備前殿はまさに恩人でござる」

清顕はぽかんと口を開けた。

顯綱はその仕草を見て笑いが込み上ったが、ぐっと堪えた。そしてまんざらでもないといつ顔で少し困った仕草をして見せ、清顯に寛恕を促した。

清顯は顔を歪めて苦笑しながらも、度量のあるところを見せてくる。

「……う、うむ。そうでもあるつの。備前、これからも一本松殿に協力してやれ」

「はつ」

「……」

顯綱は一本松まで義国と同道し、そこで歓待を受けた。

義国は今回の一件ですっかり顯綱の処世に感じ入ったようで、小浜から嫁を迎える話もいつからかすっかり乗り気になっている。

一本松城では、事前に連絡を受けていた義国の嫡男右京亮義継が、饗宴の用意をして待っていた。

義継は長身で紅顔の美青年である。まだ二十歳そこそこでもあり、将来的にどのような当主になつてゆくのかは分からぬものの、家中の者は皆、前途洋々たる思いで彼に全面的な期待を懸けていた。勿論その思いは義国とて同じだろう。

「此度、備前殿のお陰を以つて所領を保つことができ、また備前殿の妹御を当家の嫁に迎えることとなり、これで内外共に一つの山を越えおおせたと言えましょ。これを機にそれがしは一線から身を引き、後見として家を支えてゆきたいと思います。備前殿に於かれては、今後、義継の義兄として宜しくご鞭撻を賜りたい」

「勿論、私にできる協力には、力を惜しみませぬ。お互に力を合わせてゆきたいのですな」

かくして一本松は、修理大夫義国が引退し、右京亮義継が当主となつた。

義継はほどなく顯綱の妹を正室に迎え、間に男子を一人儲ける。このうち嫡男に生まれるのが、一本松畠山家最後の当主となる梅王丸である。

一年が経過した。天正四年秋。

顯綱は約十五年ぶりに伊具郡へと手勢を伴つた。やはり清顯の名代としての出兵で、伊達軍の出兵に参陣する為である。

植宗と懇意だった相馬氏は、永禄八年の植宗死後、その遺志として遺領保有を主張、漸次出兵して丸森・金山・小斎各城を占拠していた。

それに対し輝宗が満を持して出兵したのが、この夏のことだった。

相馬方最前線の小斎城を攻めるべく、その西麓の矢野目に陣所を構えて伊達家の総力を結集させる。

そして一気に駆逐すべく、城攻めに兵を大量投入するも、季節柄発達していた湿地帯に攻め手を奪われ、その上、後方の相馬本陣より出兵してきた金山城兵に挟み撃ちされたことから、散々の敗戦となってしまった。

輝宗はこの後も矢野目を陣所として相馬軍との対峙を続け、天正十一年の和睦成立に至るまで、延々たる持久戦を展開することになる。

今回顯綱が参陣したのは、そんな矢先のことだ。

清顯が自ら出兵しなかつたのには、訳がある。

清顯の正室は相馬盛胤の妹である。また、田村氏は慢性的に磐城氏と対立関係にあることから、塩を始めとする海産物の調達は基本的に相馬領に頼らざるを得ない。

その為、相馬と正面切つて敵対する訳に行かず、直々に清顯自身が出陣することが憚られた、というのが表向きの理由である。顯綱

の私的な出兵という形にした訳だ。

相馬が優勢であればこそ、均衡を保つ意味では相馬に加担するのは不適切だし、関係性の上で伊達と相馬を天秤に懸ければ、どうしても伊達が重い。

そしてこの時期に顯綱を戦陣へ遣わしたのは、清顕にして見れば厄介払いの意味合いが強かつただろう。

一方で清顕は、安積郡制庄を日論見、動員を掛けていた。顯綱留守の塩松勢、陣代には助右衛門親綱が任命された。清顕にとってこの人事は、大内家中の、延いては塩松勢の分裂を期待するものだった。

切れ者の顯綱は、ともすれば人から反感を買つことも多かつた。それでもここまで大事に至らずに来たのは、大らかな性格の親綱が常に顯綱の傍らにいて、塩松勢の和を取り持つてきたことが、理由として大きかった。

即ち、人望篤い親綱を顯綱から引き離し、兄と同格の存在に祭り上げれば、顯綱の力を削ぐことができると考えたのだ。

だから、顯綱は早く帰りたい気持ちだったが、伊達軍劣勢の中でのそれを見捨てる形で退くことはできないし、何より輝宗や清顕から許しを得ねば、帰れる道理もない。

親綱がその心中を察してか、度々書簡にて近況を連絡していくことが、何よりの気休めとなつていた。

親綱も清顕の思惑を察知していない訳はなく、不在とはいえ塩松の惣領は顯綱であつて、此度の安積出兵でも自分は兄の名代であることを肝に銘じ、周囲にも勘違いせぬよう、再三強調していたことが推し量られる。

ある日、顯綱の陣所に輝宗が訪れた。

矢野町への着到以来ひと月を過ぎるといつのに戦鬪らしい戦鬪もなく、顯綱は無駄に過ぎる日々を苛々しながら過ごしていた。

だから不意の輝宗の訪問を、何であれ出来事があつたものと歓迎した。

「先ほど田村より書簡が届いてな 」

輝宗は相変わらず飄々とした態度で、しかし眼光ばかりは鋭く、顯綱の表情を具さに窺うように、朗らかな口調で話した。

「片平が陥ちたようだ。聞いておるかな」

安積郡は鎌倉以来、名族伊東氏が地頭として一円支配をしている。しかし代を重ね分割相続が進むうち、一族中から郡内一円を支配しある英傑が遂に現れず、強力な支配体制を逸早く確立しあおせた周辺諸氏による蚕食の場となつていた。

片平伊東氏は一族中でも大身で、天文以来、葦名氏を後ろ盾として長い間田村氏の西進を食い止めてきていた。

「弟助右衛門からは先日、先鋒を承つたとの由、報されておりました。こんなにも早く抜くことができたとは、かの者に功があつたのでしょう」

輝宗は「それでな 」と重く口を濁した。

顯綱は「如何なされましたか」と問つたが、その内容は、実は既に察していた。先刻、親綱から書簡が届いていたのだ。

「その助右衛門に、片平の家を継がせることにしたと。良きこと故、惣領の其方に報せるまでもなく、即座に決定済みと為したそつだ。伊東大和守の娘御と娶わせること」

輝宗は「其方どう思う?」といった表情で、返答を促した。

顯綱は明るい表情を作った。

「悦ばしいことです。片平といえば、名家伊東一族の本家筋とも言われております。身内ながら、助右衛門なら充分その跡を継ぐ資質を持ち合わせていると思います」

顯綱は笑つてみせた。

輝宗は黙つてその表情を見つめていた。

何故、片平が簡単に陥ちたのか。

それは、長年後援を頼んできた葦名家中の乱れが、大きな原因として挙げられる。

二年前に夭折した葦名盛興の跡を継いだのは、岩瀬郡須賀川城主、二階堂盛義の嫡男盛隆である。大御所盛氏が盛興後室伊達氏を養女と為し、これに添う形で入嗣した次第。

当主を他家、しかも半ば傘下と見なしていた二階堂氏から迎えることによつて、麾下諸将の間では主家への求心力が落ち込み、盛隆の血筋・力量に対しても、「頼りない」との先入観を抱く者が少なかつた。

その流れの中で片平伊東氏でも、これまで長年後援を葦名に頼んできたものの、今後のことを思うと、この際、田村の威勢に頼つた方が安心と判断したのだろう。

その為、田村軍の侵攻に対しろくに反撃もせず、葦名の援軍を待たずには降参してしまつたのだ。

片平城主伊東大和守祐明には男子がなかつたことから、今回清顕は、親綱をその婿と為した。そうすれば親綱は塩松から出て、且つ顯綱と同格の存在になる。

人望の篤い親綱について行きたいという者も大内家中から多数現れるだろうし、そうなれば自然、塩松の勢力も分散されよう。

親綱の奥方は中野宗時の娘で、所生の娘も三人からいたが、元龜の乱に於いて宗時が失脚したことから、その余波で正室を外されており、入嗣への障害はなかつた。

顯綱は、親綱のことは信頼していたが、周囲の者が清顯の思惑に踊らされたことを恐れ、輝宗に特に暇を請うて陣を拝うことにした。そして塩松城にて解陣後、富森へ帰る前に珍しく小浜へ寄った。

親綱は既に実母を伴つて片平へ遷つており、父義綱が迎えた。

顯綱は後継後、義綱を訪ねることはめつたになくなつていたが、別に仲違いしていた訳ではない。義綱が表舞台から身を引いた遁世を望んだことから、会えば自然と政局の話になるだろうと、顯綱が配慮していたのだ。

義綱は顯綱に跡目を譲つて既に七年を過ぎていた。

隠居後は小浜城内の屋敷にて正室と共にあって、領内へ新たに寺社を建立し、尚義が晩年想いを馳せた禅宗に傾注してその菩提を弔い、また時には杉田にて隠居している晴宗を訪ねたり、著名な画僧である雪村周繼が会津から三春へ遷つて來ていたことから、庵に参堂したりしている。

それでも顯綱が留守を頼めば、まだまだ塩松の要として家中をまとめ、周囲へ睨みを利かせることくらいはできていた。

「助右衛門はもう片平ですか」

義綱は晴れぬ表情で息子の帰還を迎えた。

「田村のやりよう、其方どう思つておる」

「やりよう、と申されますと。田村殿は父上から了承を得ることすらないままに、あれを片平へ行かせたのですか」

義綱は曇つた表情を一層暗くした。

顯綱にとつても、それは思いの外のこと。自分に無断なのは構わないが、父にまで無断なのは気分が悪かつた。

「どうか、堪えてくださりませ。片平の家に入つても、助ゑは変わりませぬ」

顯綱は、父の寂しげな表情に老いを見た。

親綱は「伊東」姓を受け継ぐことを憚り、自ら片平大和親綱と名乗つた。

片平へは近臣を数名連れて行つたのみで、外に追随を請う者も幾人かいたようだが、全て断つていた。随行した近臣も、主人に似て差し出がましいところがない者ばかりだったことから、伊東家中を乱すところが一切なく、自然にその中へ溶け込んでいった。

親綱の様子にも別段変化なく、書簡で以つて顯綱とくどいほど累次に連絡を取つていたし、暇を見ては兄よりも寧ろ頻繁に小浜を訪ねている。

即ち清顯の思惑をある程度外すことができた訳で、顯綱は取り敢えず安心した。

「この頃から志保姫は、再び体調勝れず横になつている日が多くなつた。歳はまだ三十代半ばだが、幾分腰も曲がり、髪には白いものが多く混じるようになり、姫の様相を日々濃くしている。

清顯から三春に移住させてはどうかと言わわれることもあつたが、顕綱は何かと理由を付けて避けていた。

その日も志保は布団に横になつていたが、顕綱が訪れると身体を起こした。

「無理するな。横になつておれ」

「いえ。今日は幾分気分が好いので、折りよく殿にお出でいただき、見苦しい姿をお見せして恥ずかしう「」せりますが、どうか「」ゆつくりなさつて、お話しなどされて行つてくださいませ」

「つむ。顔色も良く、元気そうで何よりだ」

志保は暫し微笑んで歓談していたが、ふと哀しい表情をすると、改まつて思い詰めたような口調になつた。

「今となつては、自ら跡継ぎを産むことも叶わず、お役目を果たせなかつたことが口惜しうてなりませぬ。勿論その負いは、總て私にあります。それでも殿に於かれましては「」子息に恵まれ、胸を撫で下ろすばかりで「」せります。もはや思い残す」とて「」せませぬ。私が死んだら、いえ今すぐでも構いませぬ。何方かよき方をお迎えして正室を据え直してくださいませ。これまでも殿には「」迷惑を懸け通しでした。こんな悪妻はどこへでも放逐して、立身の糧となる力を持つた女性を娶られませ。それが殿の御為で「」せります

「……」

「殿はもう、名代などではあつませぬ。」自身が塩松殿そのもの。

だから　　「

「志保……。『塩松殿』とは所詮名跡に過ぎぬ。尚義公には申し訳ないが、それだけのものだ。……其方は立身の足枷などではない。其方あればこそ、儂は今まで田村の麾下で我慢することができたのだ。其方なれば、とうに短気を起こして三春に楯突き、塩松は田村大膳によつて平らげられていただろう」

顯綱は突いて出るままに言葉を継いだ。

志保はめぐれた布団の上で組んだ手を見下ろしている。顯綱は動揺を隠すべく、黙つたまま志保の髪を漉いた。志保は静かに、嬉しそうな顔をした。

「其方を人の母とすることができぬのは、儂にも同じだけ責任がある。一人で気に病むな。いつも言つておろつが。子供がいたらいたで、あちらこちらへ人質に出さねばならなくなつただろう。一體に幾らいても足りぬわ。それならば始めから一人もおらぬが良い。平和なときが来たなら、その後でこされた方が、儂らにとつても生まれくる子供にとつても、なんぼか幸せかと」

「三右衛門殿らは……」

「あれらはもう石橋家のもの。其方は、大内家の嫁だ」

顯綱は志保の耳元でそう囁いて肩を抱くと、横たわらせて布団を掛けた。

「殿……」

志保は布団をめぐつて唇を尖らせた。

顯綱は困つた顔をしながらも、上げかけた腰を再び下ろすと、その手を取つた。

はだけた白い胸に肋が浮かんでいた。

志保は翌年に死んだ。

その後、顯綱は正室を置かなかつた。

天正七年秋。

かねてから小野六郷の獲得を田論んでいた磐城親隆が、再び軍事行動を起こす。

親隆直々の出陣による大軍の発動に、小野新町城主田村右馬頭清通は頻りに三春へ援軍を乞い、それを受けて清顯は総力を挙げて小野の陣に参集させた。

小野六郷は小野保とも呼ばれる小野新町を中心とする地域で、田庄村の東南に位置する。磐城領へ向けて東流する夏井川の上流域に当たることから、しばしば両氏の係争の舞台となっていた。

両軍距離を取つたまま対峙するも、秋雨に邪魔されて一気に決戦には至らなかつた。日々小競り合いが繰り返されていたが、磐城軍の攻勢に対し、田村軍は守勢に廻ることが多かつた。

塩松からも主だつた者が全て出張つていたが、多く前線へ送られ、陣中に於いても顕かに低く見なされていた。顯綱などは、田村家中の誰よりも多くの兵を動員していながら、小身の譜代よりも格下に見られ、いつものことながら家中の平静を保つのに努力を要していた。自分だけなら我慢すれば済むが、家士からの訴えを無視する訳にもいかず、事を荒立てたくないことから、宥めるのに余計な神経を使うこととなる。

そんな中、右馬頭の家士が片平勢の家士を斬るという事件が発生した。

顯綱は、斯様なことはそのうちに起きるだろうと予想していただけに、根が穏やかな弟の陣でそれが発生したことに心を傷め、話を

伝え聞くや即刻親綱の陣へ赴いた。

親綱は兄の訪問をいつものように穏やかに迎えたが、やはり顯綱同様に気疲れしている様子は見て取れる。

事件の経緯を聞くと、やはり顯綱も幾度となく家士から陳情されていたことが、親綱の陣でも繰り返されていたことが分かつた。

安積勢や塩松勢を新参者と軽視し、現地の地理に不案内な彼らへ地勢を教えるでもなく、また慰みにやる賭け事でも不正を働く、負けても支払いを誤魔化すなど、ひとつひとつは大したことではない。しかしそれが積もり積もれば、大きな一つの要因にまとめあげられるのだ。中でも、地元たる右馬頭の勢は、その傾向が甚だしかつた。

つい先日も、親綱は右馬頭の陣へ赴き、家士から訴えがある」とを陳情したのだといふ。

右馬頭は田村一門筆頭格、顯基入道梅雪斎の嫡男で小野六郷を領し、一門譜代の中で一番の大身である。清顯と違ひ鬚も生やさぬ優男であるが、いつも斜に構えて細目を更に細め、薄笑いを浮かべて人と接する、てらつた所ばかりが目に付く男である。

親綱が家士の訴えを話しても、「いずれ下々の」と陣がお開きになるまで、もつ間もなくの」とでもあらう。斯様な訴えをいちいち聞いていては、きりがない」と相手にしない。

猶も親綱が「それはそうでもありますようが、これは信義の問題であります。下々のことと申されたが、その下々あつての我々でありますよう」と食い下がつても、斜に構えてニヤニヤするばかりで、何も答えない。流石の親綱もいらつきを隠し切れなくなりそうになり、そのまま立ち去つたのだといふ。

事件はその数日後、賭けに勝った親綱の家士が右馬頭の家士に滞つて いる支払いを強く請求したことから起きた。

親綱が事件を起こした家士の引き渡しを申し入れても、右馬頭から の返答はなしのつぶてだとこいつ。

「よし、それなら儂からも言つてみよう」

顯綱は直接に清顯の所へ訴え出た。

「事件を起こした右馬殿の家士の、身柄引き渡しをお願い致します」「清顯は面倒臭そうに応対した。戦況が思わしくなかつたからだ。親綱のことに顯綱がしゃしゃり出てきて、面白くなかつたということも、あるのかも知れない。だから、顯綱の顔などまともに見ようともせず、吐いて捨てるように言つた。

「下々のことでもあひづ。今は斯様なことこちいち応じていろほゞ暇ではない。下がれ」

「ならば、戦陣が終われば、構わぬということですね」

顯綱は終始無表情だったが、清顯はその口調の変化に気付き、改めて相手を見た。

だが清顯の反応を待つことなく、顯綱は表情を固めたまま陣幕を出て、自陣に帰つた。

塙松軍の陣幕の中では、長門義員が床几に座つたまま腕を組んで眠つていた。

気配に目を醒まし、顯綱の存在に気付くと、端緒、聊か遠慮がちに口を開く。

「さて、何から手を付けましょ、ひむ？」

その目つきは楽しげですらある。

顯綱はそれを頼もしく感じ、秘めたある決意に対し、猶も片隅で抱いていた不安を振り払つた。

「今夜半、我らと片平勢にて磐城本陣を急襲する。よつて」「御意。すぐに斥候を出し、進路を確認しておきましょ。小平を借りますぞ」

長門は足取り軽く、幕をめぐつて出て行つた。

小平は、顯綱の妹と石川摂津の嫡男弾正との婚姻の際に、秘密裏の引き出物として正式に譲られた。その後、次第に百日木と疎遠になつた後も離れることはなく、顯綱の影となつて只管付き随ついた。

た。

いつものよつて、宵の口に至つてぐずつきだした天候の中、一切の準備を調えた顯綱らは、密かに出陣した。その規模は精兵を選つて最小限に留め、残つた者共は大将在陣を偽装している。

清顯には何の事前報告も入れていなかつたが、軍用付を殆ど拉致同然に同行させた。

雨は虫も鳴き止まぬ程度の細いものだつたが、道案内と為した

候を最前に立てて山間の辿道らしき狭道を進むと、相手が迂闊な  
か迷った道が良かつたのか音を潜めた進軍が奏功したのか、敵方に  
一切見つかることはなく、歩を止めたときには磐城軍本陣のすぐ手  
前まで辿り着いていた。

「ここで打ち合わせ通りに軍勢を分割、敵本陣の篝火を望んで、顕  
綱を中心として左右からそれぞれ親綱と長門に廻り込ませる。

頃よしと闇の声を揚げ、本陣日掛けで突進すると、左右からもそ  
れに続いた。当方少勢であることから相手に直接与える被害は多く  
ないものの、不意を衝いた攻撃は奏功し、ろくな抵抗を許さぬまま  
に本陣を蹂躪する。

磐城軍は泡を食つて総退却、親隆は辛くも遁れ、空が白む頃には  
全ての陣が空になつていた。

翌朝の空はからりと快晴になつた。

戻つた顕綱と親綱は、軍目付を引っ張つて清顕の本陣を訪ねた。  
「右馬殿の家士の身柄を貰い受けに参りますぞ」

清顕は何も言い返すことができないままだ。

顕綱と親綱はそのまま右馬頭の陣へ押しかけたが、件の家士は逃  
亡した後だった。

二人はそのまま陣をまとめ、清顕へ何の挨拶もなしに陣を払つた。

「兄上、それがしの為に、申し訳ないことをしました」

顕綱と馬首を並べた親綱は、済まなそうに言つた。

だが、顕綱は朗らかに笑つた。この表情は、親綱が片手に去つて  
から、家中の平穏を保つ為に習得したものである。

「これから忙しくなるぞ。助ゑ、其方にも存分に働いて貰つからな」

顕綱は、五年前に米沢で伊達輝宗から初対面の時に言われたこと  
を、思い出していた。行く末への不安と期待で、柄にもなく心が粟

立つようだつた。

三春まで戻ると、それぞれの屋敷に立ち寄つて人と物を引き払つた。

顯綱の長男三右衛門は前年、清顯を烏帽子親として元服し、石橋蔵人友顯と名乗つていた。始めは顯綱との同行を渋つていたものの、家士が皆、嬉々として顯綱の選択を歓迎したことから、最終的には同意した。

顯綱は塩松へ戻ると、友顯に塩松城を預け、尚義後室と共に暮らせた。

以降、顯綱は三春への出仕を完全に停止する。

親綱にも同様に片平へ籠らせた。

親綱は会津黒川へ使者を送ると、自分の長女を葦名盛隆の側室として差し出すことで、これまで数年の経緯を流すとの寛恕を得ることに成功する。

葦名麾下になつて以降の親綱は、伊達家を追われていつからか葦名の客分となつていた舅中野宗時（既没）の嫡男丹後時綱などと誼みを通じ、他にも顯綱が介在しない独自の人脈を築いていくことになる。

顯綱には見通しがあつた。このまま田村と手切れになつたとしても、現在、田村には塩松と事を構えたくない理由が、幾つかあるのだ。

先ず、縁談である。

田村清顯の一人娘愛姫と伊達輝宗の嫡男藤次郎政宗の、婚礼の話が進んでいたのだ。この話がまとまり、姫が米沢へ輿入れするとなつたら、塩松を通らぬ訳にはいかない。

勿論、石川領を迂回すれば大内領を通る必要はないのだが、それまでの間はいずれにしても塩松を不穏にしたくはなかろう。

尤も、既に輿入れの日取りまで決まっており、遅くとも来春にはこの理由は消える。

しかしそれだけではない。清顯は本来、婿を取りたかったのだが、たつた一人の娘を嫁に出してまで伊達氏の後援を必要としているという状況が、もう一つの大きな理由である。

南奥の状勢は日を追つて田村氏に不利な方向へ動き、その威勢には翳りの色が濃さを増してきている。佐竹氏の北進は既に止まらぬところまで来ており、白河結城氏はもとより、葦名氏との関係も刻々と密接になつてゐる。

即ち、清顯は世情の変化から取り残された結果、南への備えに手が一杯となり、塩松と事を構える余裕は当面持てない訳だ。

以上の理由によつて塩松の安全は、数年間は保障される運びとなる筈である。

当面は親綱に黒川との交誼と安積の諸勢力の糾合をしていつて貰い、顯綱自身は伊達輝宗と誼みを通じてさえおけば、何処の麾下に就かずとも、攻め込まれる気遣いはない。

その輝宗とて、依然として相馬氏との戦いが長引いており、当面、脅威となる恐れはなかつた。

顯綱は、これまで十年近くも田村麾下としてその国力に精通したことから、この間に自力を蓄え、畠山氏の協力を利用すれば、田村の勢力を打ち碎くことは充分可能だと踏んでいた。

一気に田村氏を下し、塩松・一本松・安積・田村の勢力を一つにすれば、伊達・佐竹・葦名といった大勢力に充分伍してゆくことができよう。

その後、一・三年の間、顯綱は伊達軍の伊具戦線へ援軍を送つて輝宗との誼みを深め、清顯に対しては、出頭を促す使者が幾度となく訪れながらも、のらりくらりと言い逃れていた。

予測通り、清顯は愛姫の嫁入りの後も戦禍に明け暮れ、塩松に制裁を下す暇を持てないばかりか、南方戦線にて国力を擦り減らしてゆく。

逆に顯綱は着実に国力を蓄え、周辺への政事的な関与をして協力関係を強めてゆき、名声を更に高めていった。

中でも一本松に対しては、天正八年に義国が死んだ後は、若い当主義継の義兄として一層干渉を深め、家中をも手なずけている。

顯綱が見るに、義継は体格が良いだけでなく頭もなかなかに明晰で、利発な面も見て取れる。天正十年春には、田村氏の安積出兵に對して、葦名氏と連繫してこれを擊退し、その余勢を駆つて田村与党たる同郡北部の高倉や日和田など数箇所を抜いて麾下に加えるなど、実績を着実に積み重ねている。

一本松家中でも評判はつなぎのぼりで、「畠山の威勢を再興するのは若殿、右京亮義継様を擋いて他にない」と、期待を一身に集めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0073z/>

---

変節

2011年12月21日22時52分発行